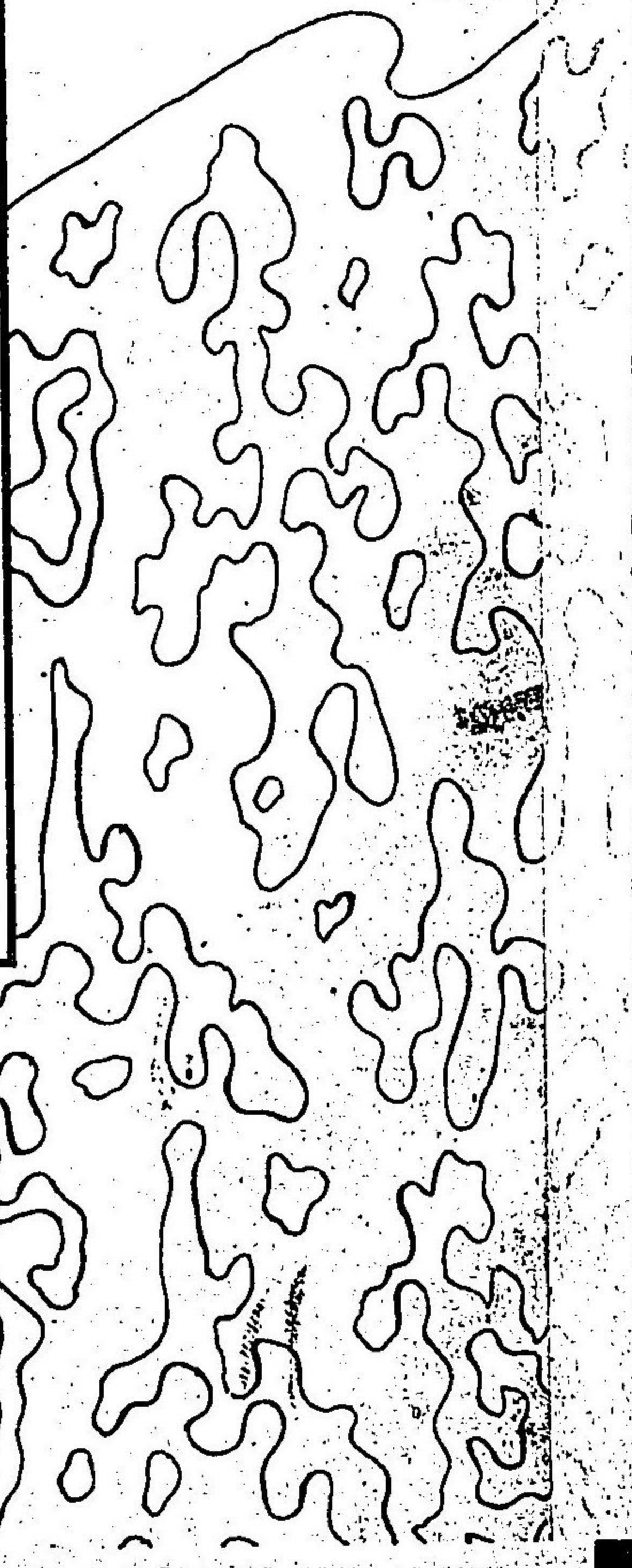
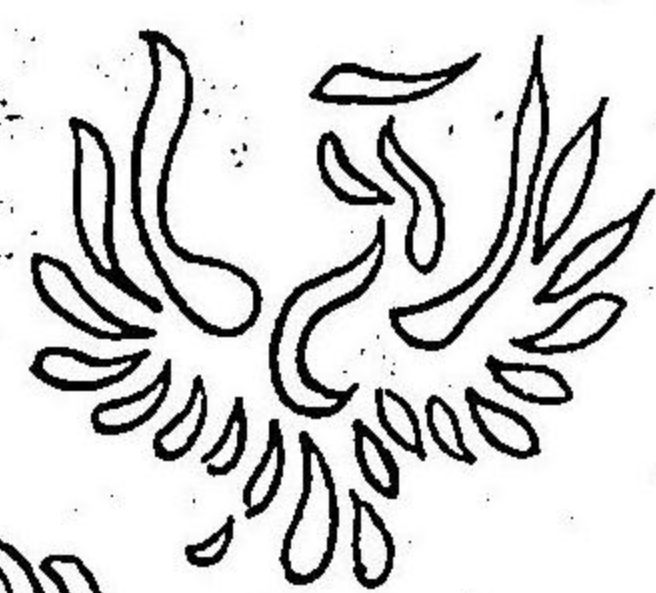
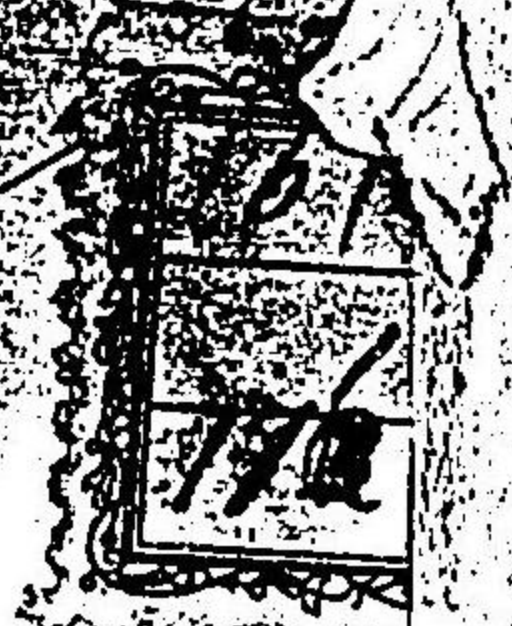


古今和歌集





古今和歌集序

紀叔

夫倭歌者託其根於心地發其花於詞林者也

能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者

其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化

人倫和夫婦莫宜於倭歌倭歌有六義一曰風二曰賦三曰

比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之嘯花中秋蟬之吟樹

上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七

代時質人淳情欲無分倭歌未作逮于素盞鳴尊到出雲國

始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童

之女莫不以倭歌通情者也爰及神代此風大起長歌短歌

(一)

(二)

旋頭混本之類雜體非一源流漸繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如難波津之什獻天皇富緒川之篇報太子或事關神異或興入幽玄但見上古歌多存古質之語未爲耳目之翫徒爲教誡之端古之天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者獻倭歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以隨民之欲擇士之才也自太津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之字化我日域之俗民業一改倭歌漸衰然猶有先師柿本大夫者高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人者並倭歌仙也其餘業倭歌者綿綿不絕及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞雲

(三)

興艷流泉涌其實皆落其花孤榮至有好色之家以此爲花鳥之使乞食之客以此爲活計之媒故半爲婦人之右難進大夫之前近代存古風者纔二三人而已然長短不同論以可辨花山僧正尤得歌體然其詞花而少實如圖畫好女徒動人情在原中將之歌其情有餘其詞不足如萎花雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然其體近俗如買人之著鮮衣宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾淳滯如望秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通姬之流也然艷而無氣力如病婦之着花粉大友黑主之歌古猿丸大夫之姿也頗有逸興而体甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者不可勝數其大底皆

文粹無下
悲哉二字

有一本顯下
字伏惟二

以艷為基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不用詠倭歌。悲哉。悲哉。雖貴兼相將。富餘金錢。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適為後世被知者。唯倭歌之人而已。何者。語近人耳。義慣神明也。昔平城。天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過百年。其後倭歌棄不被採。雖風流如野宰相。雅情如在。納言而皆以他才。聞不以斯道顯。陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變為瀨之聲。寂寂閉口。砂長為巖之頌。洋洋滿耳。思繼既絕。之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家

文粹哉作
乎

集并古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒為二十卷。名曰古今倭歌集。臣等詞少春花之艷。名竊秋夜之長。况哉進恐時俗之嘲。退慚才藝之拙。適遇倭歌之中。興以樂吾道之再昌。嗟乎人丸。既沒倭歌不在斯哉。于時延喜五年。歲次乙丑。四月十八日。臣貫之等謹序。

是の習細
字のの
下所入

(一)

やまどうたは。ひとのことちまたねとして。よろひのことの葉とぞ
 なれりける。よの中に阿るひと。ことあきしゆきものなれば。ことろ
 よれもふことをみるものまぐものにつけて。いひいださるあり。花
 よなくうぐひす。水よすむかひすのことあきまけは。いさとしりける
 うごかし。えぬれよ神をもわはれとおもはせ。まこと女の中
 この歌。あめつちのひらけをまじりけるとまよりいでまよけり。あま
 きはしのしたに。神を神とな
 り給へることをいへるうたなり。しかわれども。世よつたはることば。ひさ
 かたののあしして。したてるひめにいじまり。したてるひめとは。あめわ
 神のかたちをかたに。うつりてかやくをよめるえびすうたなるべし。阿らがね
 これらは。おしげかすもさだまらず。歌のやうおもわらぬこと。いもなり。阿らがね

のつちよしとは。すさのさのみことよりぞおこりける。ちのやふる
 神代よ。歌のもじもあまらさ。すなほよして。こと心のわきがた
 かりけらし。人の世となりて。すさのさのまことよりぞ。もうもじわ
 まりひともじのよまける。すさのさのみこととは。あまてるおほん神のこれかみな
 たまよとさし。うのこころま。やいらの雲のたつをみて。よみ給へるあり。
 やくもたのら。つもあまか。つは。あまやんがまつくる。うのやくがきを。かくてぞ花
 さめで。鳥さうらやま。かすまをわかれ。露をかなしむ。こころこと
 葉おほくちまぐ。よなりよける。とほきをまらも。いでたつあしも
 とよりそまよりて。とし月をわたり。たかまやまも。ふんどのちりひ
 じよりなりて。あま雲たなびくまでおひのぼれるごとくよ。このう
 たも。かこのごとくなるべし。あよいつの歌。みかどのおほんをま
 めなり。おほさ。たのみかどの。なにとつ。あて。みことさ。こえける。とき。東宮。たがひ
 にゆき。あて。あまの。あつ。た。は。で。三年。になり。ければ。主。た。い。ふ。人。い。ふ。か。

おほさ
 とをみか
 とをまつ
 れて歌に
 詞并るに
 はつ歌の
 首の歌に
 後人の皆
 書ろへた
 る之へた

りおもひて。よみてたてまつり。けるうたな
 ぞ。こればなは。うめのはなをいふなるべき。あさか山のここのは。うねあめ
 たいふれよりよみて。あつらぎれおほきみを。みちれくえつあはしたまけるとき
 りけれ。すさまじかりければ。うねめなまける女の。かはらけ
 どりてよめるなり。これにす。おほきみのこころとけにける。このふた歌。う
 たの父母のやうよてぞ。手ならふ人のいしめよもしける。うもくう
 たのさまむつなり。からのうたよもかくぞあるべき。うのむくこの
 ひとつにめ。そへうた。大さくは御門を。そへたてまつれるうた。
 なよいつよさくやこの花冬こもり今ははるべきとさくやこのいな
 としへるなるべし。ふたつよいかぞへうた。
 咲花よおもひつくそのあぢきなき身よいたづきのいるも知ずて
 としへるなるべし。これは。た。い。こ。と。に。い。ひ。て。も。の。に。た。と。入。な。と。も。せ。ぬ。も。れ。あ。り。
 に。た。い。こ。と。う。た。と。い。へ。る。な。ま。つ。よ。い。な。ず。ら。う。た。

君にいとわしたの霜のねまていなは戀しきごとにかき江や渡らん
といへるなるべし。こをばものにもなすらへて。うれがやうになんある。とやうに
いふなり。この歌よくかなへりとも見えすたらねのおやれ
あふこのまゆともいふせくもあるかいもに
はすてかやうなるやこそにはかなふべからむ。よつにわたと一うた。

こが戀のよむともつきせわりそ海の濱の眞砂はよまつくすとも
といへるなるべし。これはよろづの草木鳥けだものにつけて心をみする。この
歌はかくれたるところなんなき。されどはじめのうへうたを
おなじやうなれば少しさまをかへたるなるべし。すまの蟹のしほやくけぶり
風をいたみおもはぬかたまたなびきにけり。この歌なきやかなふべからむ。うつ
にわたとことうた。

うつにわたのなき世あてせはいかひがり人の言の嬉しからまし
といへるなるべし。これはこの世のほりたしさをいふなり。この歌。心を
ろをみつるかなはあち
るべくも風ふかぬよにむつようつにひうた。

この世のうつにわたもせむけだんてのまじりよまはら

花をもちて
そのもてあ
の三字脱
せるなる
べし後捨
遣集序に
花をもち

くりせで。といへるなるべし。是は世を譽て神を告る。此歌。いはひうたを
ろづよをいはふ心は神子しるらん。これらやすこしるなふべか
らむ。おほよろむくさあわかれんとはえあるまじき事たなん。今の世中。うつよつ
き。人の心。いなよなりよけるより。わたなる歌。いかなきことのみい
でくれバ。うつよのみの家ようもれ木の。人しれぬとよなりて。まめ
なるどころよは。花すよき。ほよいだすよきことよもあらずなりよた
り。そのはじめを思へバ。うつよるべくなんあらぬ。いよしへのよへの
みかど。春の花のわした。秋の月の夜毎よ。さぶらふ火くをめして。こ
とよつつけつ。うたをたてまつらしめたまふ。あるハ花をそうとて
たよとあき所よまどひ。あるハ。月を思ふとて。しるべなきやまよた
どれる心。くを見給ひて。さかし。おろかなりと。しらしめしけむし
かあるのみよわらず。うつにわた石よたと。つくハ山よかけて。君をね

あろはれ
 限あはれ
 ますどい
 よわなし
 とあまし
 捨遣集序
 皆此序を
 らは古の
 本にはも
 てあはれ
 とあはれ
 へしなる

(六)

がひ。よろこび身よすぞ。たのしみ心にあまり。ふむの烟よようへて
 人をこひ。松むしのねよ友をしのび。高砂すみのえのまつも。あひれ
 いのやうよればほは。男山のむかしを思ひ出て。きこなへしの一時をく
 終るよも。歌をいひてぞなぐさめける。又春はあしたに花のちるを
 見。あきは夕ぐれに木のののおつるをまき。あるは。としごもよかゞ
 そのかけよそゆる雪と浪とをなげき。草の露。水のあまを見て。わが
 身をれどづき。あるは。きのふはさかえおごりて。時をうしあひ世よ
 わび。したしかりしもうとくなり。あるは。松山の浪をかけ。野中の水
 をくみ。秋はぎのしたばをながめ。あかつきのしごのいねがきをか
 ぞへ。あるは。くれ竹のうきふしを人よいひ。よしの河をひきて。世中
 きうらみきつるに。今ふむの山も烟たらずなり。なうらのいしもつ

(七)

くる也とさく人も。歌にのミぞ。心をなぐさめけるいにしへよりか
 かつたはるうちよも。ならの御時よりぞ。ひろまりよける。かのおほ
 む世や。うたのころをしろしめしたりけむ。かの御ときを。おほき
 みつのくらる。かきのもとのひとまらなん。うたのひじりよありけ
 る。これハ。君も人も身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ立
 田河よながるくもみぢをば。みがどのおほんめよ。にしきとみたま
 ひ。はるのあした。よし野やまのさくらハ。人まろがこころよハ。雲か
 どのみなむおほえける。また。やまのべのわかひとといふ人ありけ
 り。歌よわやくたへなりけり。人まろハ。あか人がかみにたくむこ
 とかたく。わかひとハ。人まろがしもよたたくむことかたくあむありけ
 る。ならのみかどのゆうた。たつたがはもみぢみだれてながるめ。わたらばにしきあ
 かやたえなん。人まろ。うめの花もれどもみえずひさかたのあまぎる。雪のなべてふ

色いばほのくどあかしのうらのあさぎ里にしまかくれゆくふねをしぞおもふ。赤人はるのいよそみれつみよとこしわれづのをなつかしみひとよねにける。わかうらにしばみちくればかたをなみあま。このひととををきて。又すぐれたる人も。くれれけのよくよまこと。かたいどのよりくになえずぞあまける。これよりさきのうたをわつめてなん。萬えふじうと名づけられたりける。こよよ。いよしへのことをも。歌のこころをも。しれる人。わづかよひとりふたりなりき。しかわれど。これかれえたるどころ。えぬどころ。たがひよなむある。かの御ときよりこのかた。としはもいどせあまり。よいとつぎよなんなりよける。いよしへのことをも。歌をも。しれる人よむひとおほからず。今このことをいふよ。つかさくらぬたかき人を。たやすきやうなればいれず。そのほかよちかき世よりの名きこえたる人の。すなわち。僧正遍昭の。歌のよまひえ

たきとも。まことすくなし。たさへ。さげのける女を見て。いたづらにこころさうごかすがごとし。あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまあまぬこころもてなにかは露をたまあまむく。さかのにて馬よりおちてよめる。なにもでしをれるばのりすをみなへしわれおちにさど人にうたるな。ありいらのなりひらへ。うのこころあまりて。言葉たらず。しほめる花のいろなきて。よほひのこれるがごとし。月やあらぬはるやむかしのはる。あらぬわがもめでしこれぞこのつもれば人のおいとなるもれ。ねぬるよのゆめをそかきままどろめばいやはうなにもなままざる哉。ぶんやのやすひてハ。ことばいたくみて。そのさま身よおはず。いんづ。あまき人のよきぬきたらむがごとし。秋のらにのべのくを木のしをるまはうやまかせをそのみのたにかけかくして。うぢやまの僧。ませんハ。ことばかすかにし日のくれしけふにやはあらぬて。はむめをやりたしかならず。いんづ。秋の月をみるよ。あかつきの雲よあへるがごとし。わかいははみあこのたつみまかぞす。よめる歌おほく

春のさかひ。人さもいらひ。秋のき夏草をみてつよまきこひ。あふりかや
 まよひたりたむけさのり。あるは。春夏秋冬よもいらぬ。くさ
 くの歌をなむ。えらばせたまひける。すべて千歌はたまき。なづは
 て古今和歌集といふ。かくこのたひあつめえらぬれて。山した水の
 たえず。さきのまきこひのかずおほくつもりぬれば。今あすか河の
 瀬よなるまきみまきこえず。まきれ石のいはほとなるよろこひの
 みぞあるまきこひれまくらこと入る。春の花よはひすくなくして。む
 なしき名のみ。秋のよのながまきかこてれ。かつら人のみよお
 うりかつら歌のむよらあお入る。たあびく雲のたちる。なぐじか
 のあまきこひつらあまきこひ。この世よれまきこひうまれと。此このと
 まよあつるとなえ。よろこひぬる。人まるなくなりたれと。歌のと

ととまれるかな。たとひ時うつりことさり。たのしみかなしみゆ
 きうふとも。このうたのもじあるさや。あさやまのいとたえず。松の
 このちりうせすして。まよひまのかわらぬがくしたはり鳥のあとひさ
 しくとまれば。歌のまよきもしり。ことこの心をえたらん人は。大
 ぞらの月をみるがごとくよ。まよしうまあまきて。今まこひさらめか
 も

春の風はなほ吹くはるかに
春の日はあけぬはるかに
春の鳥はあそぶはるかに
春の草はあはれはるかに
春の川はあはれはるかに
春の山はあはれはるかに
春の谷はあはれはるかに
春の池はあはれはるかに
春の井はあはれはるかに
春の井はあはれはるかに

古今和歌集卷第二

春歌上

年のうちに春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに
春はあけぬはるかに

袖ひぢて結ひし氷のこほれるを春たつけふの風やとくらん
紀貫之

春かすみたてをやゆづこみよしのく吉野の山に雪はふりつゝ
讀人不知

雪のうちにはるはまにけり鶯のこほれる泪いまやとくらん
讀人不知

うめかえにさめる鶯をるかけてなげきもいまた雪はふりつゝ
讀人不知

春たてば花とやみらんしら雪のかゝれる枝にうぐひすのなく
素性法師

心さしふかくうたてしおりにければ消あへぬ雪の花とみゆらん
讀人不知

ある人のいはく。ささのおほきおほいまうちきみれ歌也

二條后の。とう宮のみやそむ所ときこえける時。正月三日。湯まへに先しておはせ事あるあひだに。日はてりながら。雪の。かしらにふりかゝりけるをよませ給ける

春の日のひかどにあたる我なれどかしらの雪とあるぞわびしき

文屋康秀

雪のふりけるをよめる

霞たちこのめも春の雪ふきは花なき里も花ぞちりける

紀貫之

春は初あよめる

春やとき花やをうきと聞わかん驚たにもなのすも有るかな

藤原ことなは

春のはじめの歌

春さぬと人はいへとも驚けなかねのさきはあらじとぞ思ふ

壬生忠岑

寛平侍時。さよらの宮の歌合のうた

谷風にどくる氷けひま毎に打いつる浪やはるのこのつ花

源政澄

花の香を風のたよりふたぐへて驚さうふしるへにはやる

紀友則

うぐひすの谷より出る聲なくは春くるを誰かしらまし

大江千里

春たてと花も句はぬ山里は動うるねにうぐひすれなく

在原棟梁

題しらす

野へ近づく。おしを驚けさうひすの鳥ある聲は朝なくさく

詠人不知

春日野はけふは春やさう春草の聲もこもれも我もこもれり

春日野のどぶひののまひいで見よ今いふかありてわかさつみてん

深山は松の雪たふ消なくに都は野への若さ摘けし

梓弓をして春雨はふもをぬあすはへふらむわかまつみてん

仁和はみりて。みどにおははしましける時に。人

にわかなたまひける浮うた

君がため春の野にいでしわあまつむわがころもでに雪はふりつゝ

歌たてまつれとおはせられしとき。よみてたてまつれる

春日野のわかさつみにやしろたへは袖ふりはへて人のゆくらむ

貫之

題しらす

春のさるかすみのころもぬきをうすみ山かせにころみたるべうなれ

在原行平朝臣

ときはなる松のみゆりも春くさば今ひとしはれ色まごりけり

歌たてまつれとおはせられし時。よみてたてまつれる

源宗平朝臣

わがせこがころもはるさ光ふるとに野べれみせりうらまごりける

青河の糸よりかくるはるしもすみだれて花のはたろびるける

貫之

兩大寺のはどりの柳をよめる

浅みどりいとよどかけてしら露を玉にもぬける春は柳の

僧正遍昭

たいしらす

もしち鳥さへつる春は物とにあらたまれども我どふりゆく
をさこちのたづきもしらぬ山中におぼのなくもよぶこ鳥哉

讀人不知

ひでよめる
春くればかりかへるなりしら雲の道ゆきふりに事やつてまじ
かへる鷹をよめる

凡河内躬恒

題しらす
とる霞たつを見すて行がりは花なき里にすみやならべる

伊勢

折つれば袖こすにはへう花の花おととやこいにうぐひすの鳴
いろよりも香ぞふ余とおひはゆをたが袖ふれし宿のぞも

讀人不知

やどちかく梅のそなるあそびおちさなぐまの人のかにあやまたきけり
う先ればきたちよるばかりありしより人のとがむる香にうしみける

梅のほなを折てよめる
鶯のかきにぬきてふうめの花をりてかざひむれいりくるやと

東三條
左のおほい
まうち君

よろにのみおはをぞみし梅のそなるあひゆるかはをりてなまけり
う先の花をりて人あおくりける

栗性法師

君ならでたれにかみせむ梅花ほるをもかをもさる人すしる

友

らめの花にはふはるべはくら山やみはこゆをせむるも有ける

貫

宵夜ふ。梅花をゆりてと。人のいひけせば。

月よにはうきをもみえすうめの花香をたづねてすしるべりける

み

春のよれやみはあやあし梅花いるところみえねかやはかくる、

貫

とつせにまうづることにやどりける人れ家に。ひさし
くやどらで。ほとて。後あいたきりければ。かの家の
あるじ。かくさだかになむ。やどりはあると。いひ出し
て待たければ。うこにたてまけるう先の花をりて。

人はいさ心ももらすさるとは花をむかしの香ふにはひける

貫

水のはとまうめ。そなのさけりけるをよめる

伊勢

春毎にながる。川を花とみをもらぬ水に袖やぬれなん
としをへて花のかみよなる水はちりかゝるをやくもるといふらん
家にあまける梅のほなありけるをよめる

勢

くるとあくとめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらん
寛平侍時。ささの宮の歌合のうた
梅が、を袖にうつしてとめめは春はすくともうたみならまし
ちるとみてあるべきものを梅花うたてにはひの袖ふとまれる
だいしらす

散ぬとも香をだにのこせうたの花こひしき時のおもひ出にせん
人の家に。うゑたりけるさくらの花さきはしれた
りけるを。みてよめる

題しらす

山たのみ人もすさめぬ櫻はあいたくなわびぞ我みはやさん

又は里とはみ人もすさめぬ山ざくら

やまざくらわが見にくきははる霞みねにもをにも立かくまつ、
うたをけしきささのささ入の。花がめあ。さくら

●花を。さ。せ給へるをみてよめる

年ふればよはひはおいぬしかはあれと花をしみれば物思ひもなし

なぎさの院にさくらをみてよめる

よの中よもえて櫻はなありせ春の心はのどけからまし

貫之

讀人不知

素性

讀人不知

貫之

讀人不知

前のおはき
おほい
さうち君
在原兼平朝臣

題しらす

いはしるたさなくもな櫻はな手をりてもたんみぬ人はたぬ

山のはくらを見てよめる

見てのみや人にかみらむさくら花手とに折て家づとにせむ

花さありに京を見やりて。よめる

見渡せばやなぎ櫻をこきませてみやこぞ春は錦とける

櫻は花のものとて。年の老ぬるとをなげきて。よめる

いろもかもおなじむかしあさくらめを年ふる人うあらたまりける

をれるさくらをよめる

たれしかもどめてをまつる春がすみたちかくそらん山の櫻を

題奉れどねはせらさしとさ。よみてたてまつれる

櫻花さだにけらしもあし引の山のかひよりみゆるしらくも

寛平侍時。ささののみやの歌合のうた

みよし野の山べにさける櫻花ゆきかどのみぞあやまたれける

やよひに。うるふ月のありけるとし。よみける

さくら花春くといれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

さくらの花のさありに。久しくとはざりける人の

またりける時によみける

讀人不知

須性

友則

貫之

友則

伊勢

わたなりと名にこうたてれ櫻ばなとしにまれなる人もまちけり
けふこそはあすは雪をふもなきに消すは有とも花とみましや
無しらす

讀人不知
葉平

散ぬればこぼれをんるしなきものをけふこそ櫻をらば折てめ
をどらばをきけにもあるか櫻花のやどかりてちるまてはみむ
さくららるにころもはふかくめてきん花めちるま後のかたみふ

讀人不知
紀有伴

さくらの花のさけりけるを。見にまうできたりけり
る人に。よみておくりける
わがやどの花見がてらにくる人故ちりなん後ぞこひしかるべき

伊勢
みつね

見る人もなき山登の櫻はな波かのちるまんのちるまかまじ
古今和歌集巻第三十一

伊勢
勢

春歌

はる霞たな引やほのさくら花うつらほむとやいろはりゆく
まじといふにあらでしとほるものあらは何を櫻か思ひまはせし
れこそなくちるめたき櫻花あまてよの中はてのうけきは

讀人不知
人不知

此さどにたびねしぬへき櫻ばなちりのまがひに家お忘れて
うつせみの世にも似たるか花さくらさくとみしまにかつ散にけり

僧正遍昭に。よみておくりける

櫻ばなちらばちらなんちらずとてふるさと人のまても見なくあ

これたかのみこ

櫻ちるはなのとこは春ながら雪ふりつゝさえがである

予うく法師

花ちらすかせれやどりたれかしの我にをしへよゆきとらむ
うりん院にて。さくら花をよめる

素性

いざ櫻我もちりなんひとさうりありあは人あうき光見へなん
あひしれりける人れ。まうできて。かへりあける後に

ぞうく

よみて。花にさしてつかはまける

貫之

ひと光みし君もやくると櫻花けふはまらみてちらばちらなん
山のさくらを見てよめる

貫之

春がすみなにかくすらむさくら花ちるまをたにも見るべき物を
こゝちうこなひて。わづらひける時に。風にわた
らじとて。おろしこめてのみ侍けるあひだに。を
れるさくられ。ちりがたになきりけるをみて。よ

たれこめて春の行へもしらぬまにまちし櫻もうはらひにけり
藤原よるかの朝臣

東宮は雅院あて。さくら花の。みかは水あちり
てながれけるを見て。よめる

枝よりもわだに散にし花なればおちても水のあわどころなき
すがの、高世

ことさらばさかすやはわらぬさくら花みる我さへにしづ心なく
貫之

櫻の花のちりけるをよめる
よめる

さくら花とくちりぬともおもはへず人の心ぞかせもふさあへぬ
友則

久かたのひかりのせけさはるの日にしづ心なく花れちるらむ
東宮のたちはきのぢんにて。櫻の花のちるをよめる

はるかさは花のあたりをよぎてふけこころづらやうつらふとみん
藤原のよしかせ

雪どのみふるだにあるをさくら花いかにちれどか風はふくらみむ
みつね

やは高み見つゝわがこしさくら花かせは心にまかそへらなり
貫之

題まらす

春雨のふるはあみだか櫻花ちるをうしまぬ人しなれば
大友黒主

亭子院の歌合のうた
櫻ばなちりぬる風のなごりには水あき空に浪うたちける
貫之

なるのみるどの傍歌
ふるさとしありあしなられみやこにもいろはかはらず花は咲けり
よしみねの

春はうたとしてよめる
花のいろは霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春の山かせ
宗貞

寛平の傍時。ささいのみやの歌合のうた
となの木も今ははらうるを春たてはうつらふ宮に人ならびけり
素性

題しらす
春のいろはいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花のみゆらん
讀人不知

春は歌としてよめる
みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ
貫之

うらん院のみこのもとに。花見ふ北山のほとりに。
まかれりける時によめる

いざけふは春の山へにまじりなんくれなばなげの花のかげうは
素性
春の歌としてよめる

うつまでか野へに心のあくがれん花しちらすは千代もへぬし

題しらす

春毎に花のさかりはありあめをひむことは命なりけり

讀人不知

となのこど世れつねならば過してしむかしは又もかへりなきまし

ふくかせあつらへつくるものならば此ひともとはよきよといはまし

待人もこのぬものゆゑにうぐひすの鳴つる花をよめてけるあき

寛平時。きさいのみやの歌合のうた

さく花はちくささがらにわたなれどたれか之春をうらみはてたる

藤原おきかせ

はる霞いろのちくさあみへつるはたな引山のはなのかげかも

かすみたつ春の山へはどほはれどふきくる風は花のかぞする

うつろへる花をみてよめる

元方

花みればこころさへあぞうつりける色にはいでし人もころしれ

みね

題しらす

うぐをすのなくのべこどにきてみればうつろふ花にかせふふきける

讀人不知

ふく風をさきてうらみよ驚は我やは花に手だにふれたる

ちる花のなくにしとまる物ならば我うぐひすにおとらましやと

典侍治子朝臣

仁和の中將のみやすむ所の家。歌合せんとて。

しけるときによみける。

花のちることやわびしき春霞たつたの山はうぐひすのこゑ

藤原後藤

うぐひすのなくをよめる

木づたへばおのが羽かせにちる花をたきにおほせてこころなくらん

素性

驚れ。花の木にてなくをよめる

しるしなき音をもあくるあ驚のことしれみちる花ならなくに

みつな

題しらす

こまなべていざ見にゆかむふる郷は雪とのみころ花はちるらめ

讀人不知

ちるはなを何かうらみむ世中にわが身もともにあらむもののは

花の色はうつりにけりないたつらに我身よふふるながめせしまあ

小野小町

仁和の中將のみやすむ所の家。歌合せんとしけ

るときによめる

をしとあもふ心といとあよられなむちる花ごどにぬきてとくをむ

素性

しがれ山でえに。女のおほくわへりけるに。よみて

つかはしける

あづさゆみはるの山をこえくれば道もさあへす花を散ける

貫之

寛平時。きさいのみやの歌合の歌

春の野にわかなつまむとこしものを散らふ花に道はまどひぬ

やま寺にまうでたりけるによめる

やどりして春のやまへおねたるよは夢のうちにも花予ちりける

寛平正時。ささいのみやの歌合のうた

吹かせと谷に水どしなかりせばみやまがくれのはさをみましや

しがよりかへりける女どもれ。花山にいでて藤の

となのもとお立よりて。かへりけるに。よみてお

くまける

よろにみてかへらむ人にふぢの花はひまつはれよ枝はをるども

家に。ふぢの花さけりけるを。人れたちとまりて。

見けるをよめる

わが宿にさける藤なみたちかへりすぎがてにのみ人のみるらむ

題しらす

いまもかも咲にはふらんだちばなのことまのさきのやまふさの花

春雨に匂へるいろもあかなくに香さへあつかし山ふさのはさ

山ふさはあやかくささう花みむとうあけん君がこよひこなくに

よし野がささしの山ふさふく風にうこの影さくうつろひにけり

題しらす

かはづなくるでの山ふさちとにけり花のさかりにあはまじ物を

遍 昭

み っ ね

讀 人 不 知

貫 之

讀 人 不 知

此歌は。ある人のいはく。たちばさのきよどもが歌なり。

春のうたとてよめる

おもふとちばるの山へにうちむれてうこもいとぬたひねしてしが

はるの。とくすたるをよめる

梓弓とるたちしよりとし月のいるがごとくもおもはゆるかな

やよひに。鶯のこゑ。久しくきこえざりける哉。よめる

鳴とむる花しなればうぐひすもはては物うくなりぬべうこ

やよひのつごもりがたに。山をこへけるに。山川

より。花れあがれけるを。よめる

はなちれる水の中にくとめくをば山には春もなくなりけり

春を。しみて。よめる

をしめどもとしまらなくにはる霞かへる道にしたちぬと思へば

寛平。涉時。ささいの宮の歌合のうた

こゑたえずあけや鶯ひとせにふたへびとたふくへさてるかわ

やよひはつごもりの日。花づみよりかへりける女

どもをみて。よめる

とらひへさきものとはなしにはかなくもちる花ととにたふこころか

やよひのつごもりの日。雨のふたのうりけるに。藤の

素 性

躬 恒

貫 之

ふ か や ぶ

も と か た

お さ が せ

躬 恒

はなを折て。人につかはまける
ぬれつゝぞしひてをどつる年の内に春をいふかもあらじと思へば
亭子院の歌合に。はるのはての歌
けふれみど春をねはぬとさだにもたつことやすき花のかけかは
古今和歌集卷第三

業平
躬恒

夏歌

題しらす

我宿のいけの藤なみさきにけり山はとくさすいつか来なかむ
この歌は。ある人れいはく。かきのもとの人まろがこ
うづきにさけるさくらをみて。よめる
あはきてうことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん

讀人不知

題まらす

さつさまつ山はとくさすうちはふき今もなかなんこぞのふるこゑ
五月こばなきもふりなん郭公まだしきはせのこゑさかばや
さつさまつ花たちはなのか枝かけはむかしれ人の袖の香ぞする
いつのまにさつさま来ぬらんあし引の山はとくさす今もなかなん
けさ来なきいせだ旅なる郭公花たちはなにやせはからなん
おどは山をこへける時に。はとくさすれなくを。

紀利貞
讀人不知
伊勢
讀人不知

おどはやまけさこえくれははとくさすこすゑるかに今ぞ鳴らる
郭公の。はじめてなきけるを聞て。よめる
はとくさすはつとささけばあぢさなくぬしただまらぬ戀をしるはた
ならの。いさのかみ寺まで。はとくさすれ鳴を。よめる
いろのかみふるさみやこの郭公こゑばかりころむらしありけき
題しらす

友則
素性
讀人不知

夏山になくはとくさす心あらばものおもふ我あこゑなきのせぞ
はとくさす鳴こゑさけばわかれあしふるをさへぞこひしかりける
郭公ながなくさとのあまたあはなほうとまれぬ思ふものから
おもひいつるとさきはの山の郭公からくれなゐのふり出てすなく
こゑはして涙はみへぬはとくさす我ころもでのひづをからなん
あし引の山はとくさすをさへてたきかまざるをねをのみぞ鳴
今さらにやまへるさほとくさすこゑのかぎりはわがやせになけ
やよやまて山はとくさすことつてむわれよの中にすみわひぬとよ
寛平侍時。さよののみやの歌合のうた
さみだれにもれ思ひをれば郭公よふかくなきていつちゆくらん
夜やくらさ道やほとへるほどくさすわがやせをしも過がてになく

みくはのまぢ
友則

やどりせし花たちばなもかれなくもなと郭公こゑたぬぬらむ
 夏のよのふすうとすきばはとくさすなくひとこゑあくるしのめ
 くるくかどみればあけぬる夏のよをわかすどや鳴山はとくさす
 夏やまに戀しき人や入あけむこゑふりたて、なくはとくさす
 題しらす
 紀秋岑

こすのなつなきふるしてしはとくさすうれかあらぬか聲のかはらぬ
 五月雨の空もとくさす何をうしどか夜たゞなくらむ
 貴之

はとくさすこゑもさこえず山彦ははかになくねをこたへやはせぬ
 先して。郭公まつ歌よ先と有ければ。よめる

山に。はとくさすのあまけるをさして。よめる
 躬恒

はとくさす人まつ山にあくなればわれうちつけに戀まざりけり
 之

こやくすみける所にて。郭公のなきけるをさして。
 よめる
 たみぬ

むかまへや今もこひしき郭公ふるさどにしもさきてさつらむ
 郭公われとはあしにうの花のうき世の中になきわたるらむ
 躬恒

はちすばれにぞりにしまぬ心もて何かは露を玉とあまむく
 月のおもしろかどけるよ。あつつきがたによれる
 夏のよはまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん
 となりより。床夏は花を。こひおこせたりけ
 れば。をしみて。この歌をよみて。つかはさける
 ちどをだにすゑじとぞおもふ咲しよりいと我ぬる床夏の花
 みな月のつこもりの日。よめる
 躬恒

夏と秋と行かふ空のかよひちはかたへとくさしき風やふくらむ
 古今和歌集巻第四

秋歌上
 秋立日よれる

秋さぬとめにはさやかにみへねともかせのおとあふおどろかれぬる
 秋立日。うへれをのこども。かもの河原に。河せう
 藤原敦行朝臣

えうしける。ともあまのりてよれる
 河風のすしくもあるかうちよする涙とともによ秋はたつらん
 貫之

わがせこが衣のするをよきかへしうら先づらしきあきのはつかせ
 題しらす
 讀人不知

きのふころさなへどりしかいつのまにいさばうよきて秋かせの吹
秋かせの吹ふし日より久かたのあまのかえらにたゝぬ日はなし
久かたのあまればはらのわたし守君わたりなばかぢかくしてよ
天の河もみぢをはしあわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ
こひくゝてあふ夜はこよひあまの河さうりたちわたりあけずもあらなん

寛平彦時。七日の夜。うへにさぶらふをのこども。

歌たてまつれとおほせられける時。人にかはりて
よめる

あまの河あせせる涙たどりつゝわたりはてねばあけずしにける

友 則

おなじ御時。ささいの宮に歌合のうた

契けん心ぞつらき織女のとしにひとたびあふわあふかは

おき かせ

七日は日れ夜よ光る

年ととあふとはすれるたなばたのぬるよのかすすくななりける

躬 恒

織女にかしつるいとのうちこへてとしれをながく戀やわたらむ

題しらす

こよひこん人にはあはじたなばたの久しきはとまらもころすれ

素 性

なぬかのよの。あかつきによめる

今はとてわかるゝ時はあまればはわたらぬさきに袖をひぢぬる

むね ゆき

やうかの日よめる

けふよりはいまこん年のきのふをぞいつしかどのみ待わたるべき

た い み ね

題しらす

このまよりもとくる月のかげみれば心つくしの秋は来みけり

讀 人 不 知

大かたの秋くるからにわが身ころうなし死ものと思ひ去りぬれ

我た光にくる秋にしもあらなくに虫たねきけばまつろかなしき

物ごとに秋ぞかなしきもみちつゝうつるひゆくをかきりとおもへば

ひとりぬるとこは草ばにあらねども秋くるよひは露けかりけり

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとば時はわかねせあきせよぞもの思ふことのかぎりなりける

かんなりのつばに。人々あつまきて。秋れよをし

む歌よみけるついでに。よめる

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらに寐てあかすらむ人さへぞうき

躬 恒

題しらす

しらくもにはねうちかはしとふ鷹のかすきへみゆるあきせよの月

讀 人 不 知

さよ中に夜はふけぬらしかりがねのさこゆる空に月わたるみゆ

これさだれみこの家の歌合によめる

月みればちいものこずかましけれ我身ひとつの秋あはあらねど

千 里

久かたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまざるらん
月をよめる
元方

秋のよの月のひかりしわかればくらぶの山もこえぬべうなり
人のもとにまかきりけるよきりくすのなきけ
るを聞てよめる
藤原忠房

さりとすいたくな鳴を秋のよの赤がきおもひはわきすまされる
是貞のみこの家の歌合のうた
としゆき

あきの夜のわくるもしらすなくむしは我ごと物やかなしるらむ
だいしらす
読人不知

秋之きのいろづきぬればきりくわがねぬとやよるまかなしき
あきのよは露ころこにさむからし草むらこども出れわふれは
さみしのふくさにやつるふるさとはまつむしのねふかなしかりける
秋の野に道もまどひぬまつ虫のこゑするかたに宿やからまし
あきの野に人まつむしのことゑすなりわれかど行ていざとふらはむ
もみぢばの散てつもれる我宿にたきを松むしこら鳴らん
ひくらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山のうげあふ有ける
日ぐらしのさく山さとの夕ぐればかせよと外にとふ人もなし
はつかりをよめる

持人にあらぬはがらはの鷹のけさなくこゑのめづらしきかな
是貞のみこの家の歌合のうた
元方

秋かせにこつ厂がねをさきこゆなるたが玉章をかけてきつらん
題しらす
友則

わがかどにいなおほせ鳥れなくなべにけさふく風にかりは來にけり
いとこやも鳴ぬるかりかしら露のいろどる木々も紅葉あへなくに
はる霞かすみていみしかりがねは今をさくある秋さきのうへに
夜涼さむみ衣かりがね鳴なべに秋の下葉もうつろひあけり
この歌は。ある人のいはく。かきのもとの人まろがなとと。

寛平修時。ささいのみの歌合の歌
あさかせにこゑをほにあげてくる船は天のとわたる鷹にぞ有ける
藤原管根朝臣
かりの鳴けるをきしてよめる
みつね

うきことを思ひつらねてかりがねのなきこゑわたれあきのよなく
貞是のみこは家の歌合のうた
読人不知

山さとは秋ころこにわびしけれ鹿のさくねにめをさましつゝ
おく山にもみぢふみわけ鳴しかのこゑさくとき予秋はかきしき
題しらす
読人不知

秋はぎにうらびれをればあし引のやましたとよみしかれ鳴らむ
(三二)

あき萩をしがらみふせてなく鹿は先にはみえずておどけさやけき

是貞のみこの家は歌合によめる

秋はぎの花さきにけりたかさこのをけへの鹿は今やなくらむ

ひかしわひしりて待ける人の。あきの野に下あひて。ものがたりしけるついでに。よめる

あきはぎのふるえにさける花みればもとの心はわすさざりけり

題しらす

あきはぎの下葉いろづく今よりやひととある人のいねがてにする

なきわたる鷹のなみたやおちつらむ物思ふ宿の萩れらへの露

はぎの露玉にぬかむとればけぬよしみん人は枝なから見よ

をぞで見ばおちずしぬへきあきはぎの枝もたわくにおけるまら露

萩が花ちるらむをの露じもにぬきてをゆかむさよはふくとも

是貞のみこは家の歌合によめる

あきの野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

題しらす

名に先でしをれるばかりう女郎花わおちにきと人にかたるな

僧正遍昭がもとあ。ならへすのりける時あ。をぞ

利行

躬恒

讀人不知

交屋朝康

遍昭

こ山にて。をみなへしを見て。よめる

女郎花うしとみつゝぞ行すぐるをこ山にしたてりとおもへば

これきのだみこの歌合のうた

秋のゝにやとめえすべしをみなへし名をむつましみたひならなくに

題しらす

女郎花おほかる野べにやとりせばあやなくわたの名をやたてなん

朱雀院の。をみなへしあはせに。よみて奉りける

女郎花秋の野風あうちなびきこゝろひとつをたれによすらん

あきならであふことかたき女郎花天のかはらにおひぬものゆゑ

たがあきにあらぬものゆゑ女郎花などいろに出てまださうつろふ

つまこふも鹿ぞなくなるをみなへしおのがすむ野れ花とまらずや

女郎花ふき過てくる秋かせはめには見へぬと香ころるける

人のみることやくるしきをみなへしあき露にのみたちかくるらむ

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを

物へまかりけるに。人の家に。女郎花うゑたりける

を見て。よめる

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたるやとにひとりたてれば

寛平彦時。藏人所ののことも。さが野あ。花みむ

ふるの利行

をのゝよしき

たのおほい
まうち君
藤原定方朝臣

貫之
躬恒

忠岑

兼覽王

とて。まかりたりける時。かへるとて。みな歌よみ

けるついでによめる

平貞文

花にあかで何かへるらむをみなへしおほかる野べにねなまし物を

利行

なにかきてぬぎかけしふぢばかまくる秋とどに野べをにははす

貫之

ふぢばかまをよみて。人につかはしける

素性

やどりせし人のかたみか藤ばかまわすられかたき香にほひつゝ

貞文

ふぢばかまをよめる

素性

ぬしまらぬ香ころにはへれ秋の野にたがぬぎかけし藤ばかまぞも

貞文

いまよりはうゑてだにみじ花すゝきはにいつる秋はわびしかりけり

貞文

寛平時。ささの宮の歌合のうた

貞文

秋の野は草のたもとか花すゝきはふいでくまねく袖とみゆらん

在原むねやな

われのみやわはれとあはむはむきりくす鳴夕かけのやまとなでしこ

素性

題しらす

素性

縁なるひとつ草をぞ春はみじ秋はいろくの花にぞありける

讀人不知

百草はあきのひもどく秋の野ふたもひたはれむ人などがめず

讀人不知

月くさにもはすらむ朝つゆにぬれての後はうつろひぬとも

讀人不知

仁和のみかど。みこにおはしましける時。ふるの
たき傍覽せんとて。おはしましける道に。遍昭が
母の家に。やどりたまへしける時に。庭を秋の
につくりて。おほむもれがたりのつばでに。よみ
てたてまつりける

遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野となる

遍昭

古今和歌集卷第五

秋歌下
是貞のみこの家の歌合れうた

ふくからに秋の草木のしをるをばうべやまかせをわらしといふらむ

文屋康秀

草も木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかまける

さのよしもち

秋の歌合しける時によめる

さのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風のおとにや秋夜聞きたるらん

さのよしもち

題しらす

讀人不知

霧たちて鴈をなくなるかたをかれあしあ原はもみちしぬらん

讀人不知

神な月しぐれもいまだふらなくにかねてうつろふかみなびのもり

讀人不知

ちはやふる神なび山のもみぢはに思ひはかけしうつろふもれを

讀人不知

貞観時。綾綺殿に前ふ梅の木ありけり。西のかたに

讀人不知

せせりける枝の。もみぢはじめたをけるを。うへに
さふらふをのこ。をもれよみけるついでよめる
おなじえをわきてこれはのうつろふはにし。秋のはじめありけれ
いし山にまうでける時。おとばやまのもみぢをみて。
よめる

藤原勝臣

秋かせのふきに去日よりおとほ山みねの梢もいろづきにけり
これさだのみこの家の歌合によめる

貫之

しら露の色はひとつをいかにして秋のこのはをら。にうむらん
秋のよの露をばつゆとあきながら馬のなみだや野べ狼うむらん
だいしらす

としゆき
忠岑

秋のつゆいろく。ことにかけばこら山は。このはのちくさあるらめ
もの山のはどりにてよめる

讀人不知

雨ふれを露ももらじをかさどりの山は。ぬかでもみぢうめけむ
神れやしらのあたりをまかりける時に。いかに
うちの紅葉を見てよめる

貫之

千早振かみのいかににはふ葛もあきにはあへすうづるひにけり
秋の歌とよめる

貫之

是貞のみこの家の歌合によめる

あめふればかさど山のもみぢはは行かふ人のうでさへうてる

忠岑

寛平時。ささいれ宮の歌合のうた
ちらねどもかねてををしきもみぢは。今はあきりの色とみつれば
大和の國おまかりける時。さほやまに。霧のたて
りけるを見てよめる

讀人不知

たがための錦なればか秋ぎりけきはのやまべをたちかくすらむ

友則

秋ぎりとけさはなたち。さほ山のは。いろの紅葉よろにてもみん
あきの歌とよめる

讀人不知

佐保山れ。いろの色はうすけれとあきはふかくもなりにけるかな
人のせんざいに。菊にむそびつけて。うゑける歌

坂上是則

うへしうゑば秋なきときや。さかざらむ花ころちらえねさへかれえや
寛平時。さくの花成。よませ給ふける

業平

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつほしとどやまたれける
この歌は。まだ殿上ゆるされたりけるときよ。

としゆき

めしあげられて。つかうまつるとなん。

これさだのみこの歌合のうた

露ながら折てみさくむさくの花かいせぬ秋のひさしかるべく

友 則

寛平彦時。ささの宮の歌合のうた

うゑしとさ花まぢはあありじきくうつろふ秋にわはんとやみし

千 里

おなじ彦時。せられける菊合に。すはまをつくりて。

さくの花うゑたりけるに。くはへたりける歌。ふき

おげの濱のたに。さくうゑたりけるをよめる

秋かせのふきわけにたてるしらぎくは花かあらぬ涙のよするか

菅 原 朝 臣

仙宮ふ。菊をわけて。人のいたれるかたをよめる

ぬれてはす山路のさく露のまにいつか干とせを我はへにけむ

素 性

さくれ花のもとに。人の。ひとまてるかたをよめる

花みつゝ人まつときはしるたへの袖かどけみぞあやまたれける

友 則

大澤の池のうたに菊うゑたるをよめる

ひともとゝおもひしきくをおほさはの池のうこにもたれかうゑけん

世中の。はかなきことを思ひけるをりに。菊はは

あをみてよめる

白菊の花をよめる

貫 之

こゝろあてにをらばやをらん初霜のおさまどはせるしら菊の花

躬 恒

是真のみこれ家の歌合れうた

いろかはる秋のさくをばをどくせふたふびにはふはなごころみ色 讀 人 不 知

仁和寺に。さくの花めまける時に。歌うへてたてま

つれどおほせられければ。よみてたてまつりける さ だ ぶ 丸

秋をおきて時ころありければさくの花うつろふからに色のまされば

人の家なりけるさくの花を。うつしうゑたりける

をよめる 貫 之

咲う光しやどしかはさば菊の花いろさへにころうつろをにけれ

題しらす

讀 人 不 知

さは山のはうのもみぢ散ぬへみよるさへみよとてらす月かけ

みやづかへ。久しくつかうまつらで。山里おこもり

侍けるお。よめる 藤 原 關 雄

おくやまのいはがさ紅葉ちりぬべして日ひかり見る時なくて

たつた河もみぢみだれてながる光りわたらばにしき中やたえなん 讀 人 不 知

この歌は。ある人。ならのみかどの彦歌とぞなんすそ

立田川もみぢばながる神なみのみむろの山みしぐれふるらし

又は。あすか川もみぢばながる

戀しくば見てもしのばんもみぢばをよきならしぞ山かろしのかせ
 秋かせあへずちりぬるもみぢばの行へさだめぬ我ぞあなしき
 あきは來ぬ紅葉はやとふりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし
 ふみわけてさらにやとはんもみぢばのふりかくしてし道とみながら
 秋の月やまべさやりにてらせるはあつる紅葉のすをみよどか
 吹か世のいろのちぐさにみえつるはあきのこのはのちればなりけり
 霜のたてつゆのぬきころよわからしやまのにしきのおればかつちる
 うりんぬんの。木のがげにたすみて。よみける
 わび人れわきてたちよる木のもとはたのむかげなくもみぢ散けり
 二條后の。東宮のみやつすことすける時に。彦屏風
 に。立田川に。もみぢながれたるかたをかけりけ
 る題にて。よめる

もみぢばのながれてとまるみなどにとくれなるふかき涙やたつらん
 ちはやぶる神代もさかすたつた川からくれないは水くゝるとは
 これさだのみこの家の歌合のうた
 わがさつるかたもしられすくらふ山木々のこのはのちりとまがふに
 神なびのみむろれ山を秋ゆけばにしきたちさるこころすれ
 北山に。もみぢをらむとてすかれりけることよ

素性 業平 忠岑 遍昭

見る人もなく散ぬるあくやまのもみぢはよるににしきありけり
 秋のうた
 立田姫たむくる神のわれはこそ秋のこのはれぬさとちららめ
 小野といふところあすみ侍ける時。もみぢをみて
 よめる
 秋のやまもみぢをぬさと手向をばそむ我はへぞ旅こゝらする
 神なび山をすぎて。たつた河をわたりける時に。
 紅葉のながれけるをよめる
 神なびれ山をすぎゆく秋なれば立田河ふゆぬさはたむくる
 寛平彦時。ささの宮の歌合のうた
 しら涙に秋のこのはのうかへるをあまれながせる船かどぞ見る
 たつた河のほとりあてよめる
 もみぢばのながれざりせば立田河水の秋をばたれらしらまし
 志賀の山さえてよめる
 山がはに風のうけたるしがらみはながれもあへぬもみぢなりけり
 はるみちのつらさ
 池のほとりにて。紅葉のちるをよめる
 風ふけばおほるもみぢば水きよみちらぬかげとへそこみ見えつゝ
 躬 恆

貫之 かねみの王 貫之 貫之 坂上是則

亭子院は後屏風の繪に。川わたらむとする人の。紅葉のちる木のもとに。馬をひかへてたてるを。

立とまりみてをわたらむもみちばと雨とふるとも水はまさらじ

山田もる秋のかりほにおく露はゆなおはせ鳥のなみだにける

はるも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露にぬれぬ日はなし

かれる田におふるひつぢのはに出ぬはよを今さらあはきはてぬとか

北山に。僧正蓮昭と。たけがまにまかれりけるに。

深みおはは袖にこそ入てもて出なん秋はかきりと見ん人のため

寛平侍時。ふるき歌たてまつきとおはせられけき

は。立田河もみぢばながるをいふ歌をのまて。る

深やまよりおちくる氷の色みてる秋はかきとておもひまじりぬる

年毎もみぢばながらすたつた河みなどや秋のときまとなるらん

忠 岑

讀 人 不 知

素 性

お き かせ

貫 之

夕月夜をぐらの山になくしかたをのうちにや秋はくるらむ

道しらはたづねも行かむもみぢばをぬさとなむけて秋はいにけり

古今和歌集巻第六

龍田川あしきたりるく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

やまざとほ冬をさびしきまさらける人めも草もかれぬと思へば

大空の月のひかりしきよければ影見し水すまづこほりける

今よりはつぎてふらなんわがやどのそいさおしきみふれるしら雪

ふる雪どかつすけぬらしわし引の山のたきつ瀬おとまさるなり

わが宿は雪ふまじきて道もなしふみわけてとふ人しなけをば

躬 岑

讀 人 不 知

宗 干

讀 人 不 知

雪ふれば冬もがせる草も木も春ふしらすぬ花を咲ける 貫之

志賀の山をえにてよめる

しら雪のどころもわかすふりしけばいははに咲花どころみき あさみね

ならの京にまかれりける時にやせれりける所に
てよめる

みよし野は山のしら雪つもるらしふるさどさむくなまざる之 之れのみ

寛平浄時。さざいれ宮の歌合のうた

うらちかくふりくる雪はしら涙のすゑの松山こそかどを見る おさかせ

みよし野のやまのまら雪ふみわけて入にま人のおどつそもせぬ 忠岑

しら雪のふりてつもれる山さとはすむ人さへやおもひ死ゆらむ 人

雪のふるを見てよめる

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあどはかもなく思ひきゆらん 躬岑

ゆきけふとけるをよみける。

冬ながら空よ花のちりくるは雲のおなたは春にやあるらむ ふかやぶ

雪の。木にふりかかれりける故よめる

ふゆこそとおもひかけぬを木のまより花とみるまで雪ふりくる 貫之

大和のむらまかれりける時に雪のふりける

をみてよめる 朝ぼらけありわけの月とみるまでみよし野の里ふれるしら雪 これのみ

題しれず

けぬが上へにまたもふましけ春霞たちなばみ雪まにころみ先 讀人不知

梅花それともみえず久かたのあまき雪のなべてふれは 梅の花に。雪のふりけり故よめる

この歌は。ある人のいはく。かきのもとの人丸がうたへ。

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人のしるべく 小野薑朝臣

雪のうちのうめ花をよめる

梅の香のふりおける雪あまがひせばたれかごとくわけてをらまし 貫之

雪のふりけるをみてよめる

雪ふれば木ごとに花を咲にけるいづそを梅とわきてをらまし 友則

物へまかりける人をまもて。まはすれつともま

わがはたぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおどつそもせす 躬恒

しとしのはてによめる

あら玉の年れをばとにふることば雪もわが身もふりをまよふつゝ 元方

寛平浄時。さざいれ宮の歌合のうた

雪ふりてどしのくれぬもよにこまづなはもみぢね松もみえけれ 讀人不知
 年のほてはよめる 春みちのつらき
 さのふといひけふとくらしてあすか河ながれてはやき月日なりけり
 歌奉まどおはせられし時に。よみてたてまつれる
 行どしの惜くもあるかなまする。み見るかげさへにくれぬとおもへば 貫
 古今和歌集卷第七 之

賀歌

題しらす

我君は千世あやちよさにくれ石のいははどなりて苔のむすまて 讀人不知
 わたつ海のはまれまさをかろへつ。君がちよせのあま敷にせん
 しほのやまざしでのいふにすむ千鳥君が伊代をばやちよとぞ鳴
 わがよはひ君がやちよとぞうへてとめおきてはおもひでにせよ
 仁和寺時。僧正遍昭に。七十賀給ひけるときのは歌
 かくしつゝとあもかくにもながらへて君がやちよあふよしもがな
 仁和のみかどの。みこにねはしきしける時に。傍
 ればの八十賀に。しらかねをつるにつくれりけ
 るを見て。かの侍をばよかばよとよめる
 ちはやぶる神のまじけんつらうらにちよせのさかもこえぬべう也 遍
 昭

はら河のおはいらまうち君の四十の賀。九條の家

あてしほるをまもよめる

あてしほるをまもよめる

葉 平

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

さのこれをか

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

あまのその山たのいはねをぞたてまつる灘のしら玉ちよのかすかも

この歌。ある人。在原の時。はるかどとらふ。

性 之
 貫 葉
 讀 人
 不 知

よしみねれつねなりが四十の賀だ。むすねはらとて

よろづよをまつたをさみまをいはひつるちとせの陰もすまんと思へば

内侍のかみの。右大將藤原朝臣の四十賀しけるとき

に。四季の繪かけけるうしろの屏風にかきたりける歌

春日野にわかまつみつりよろづよをいはふ心は神がしるらむ

山たかみ雲のにみゆるさくら花こころのゆきまてをらむ日やあま

りづらしきこゝろあまなくにはとくすすこころの年をわかすも有哉

住のえの松を秋かせふからにこゑうちうふるあまつしら涙

千鳥なぐさの波は河原たちぬらし山のこのはもいらまはりゆく

あさくれの色もかたらのぬききは山よりのもみぢを風がわしける

しら雪のふりまく時はみよま野のやましたかせにはなすらとける

東宮のうまれ給へとける時に。まのりてよめる

崖たかさかすがれやまにうつる日はくもるときなくてなすべらと

性

躬 岑

友 則

躬 恒

是 ね

眞 則

典侍藤原よみかの朝臣

古今和歌集卷第八

離別歌

題しらす

立わかきいなばれ山れみねにねふるまつとしきかばいまかへりこむ

そがるなく秋の萩原あさたちてたびゆく人をいつとこまたん

かぎとなき雲のよりにわかるども人を心におくらさむやは

小野のちふるが。みちれくのすけにまかりける時

に。はとのよめる

たしちねのおやのまもりとあひうふる心ばかりはせきなどいれろ

さだときのみこの家にて。ふちはらのきよふが。

あふみのすけにまかきける時に。馬のはなむけ

しける時。よれる

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらん袖の露けき

こしへまかりける人あ。よみてつかはしける

かへる山あるとはきけはるかすみ立わかれなば戀しかるべし

人のうまの。はなむけにてよめる

をしむから戀しきものをしる雲のたちなん後はなにをうちせむ

ともだちの。人のくまへまかりけるによれる

在原行平朝臣 讀人不知

さのときさだ

貫 之

わかきてはほをへたつとおもへばやかつみながらにかねて戀しき 在原しげはる
わづまれかたへまかりける人に。よみてつかはし
ける

おもへとも身をわねばめにみぬ心君をたぐへてややる いかこのあつゆゑ
あふさかの關しまさしきものならばあらずわかる君をともめよ なにはのよろづを

から衣たつ日はさかじ朝露のたきてしゆけばけぬべきものを 讀人不知
この歌は。ある人つかさを給りて。わたらしきめ
につきて。年へてすみける人をすて。だい明日
ななたつと。ばかりいへりける時ふ。ともかうも
いはでよみて。つかはしける

ひたちへまかきけるときさ。ふぢはらのきみとし
あよみてつのはしける

あさなげに見べきさきとしたのまねばおもひたちぬる草まぐらこ 龍
されむねさだが。あづまへまかりける時に。人の
家にやどりて。あかつさいでたつとて。まかりや
しければ。女れよみていだせしける

えろしらぬ今こいろみよ命あらばわれやわする人やはぬと 讀人不知
わひしりて侍ける人れ。あづまのかたへまかるけ
るをおくるとて。よめる

雲にもかよふ心のおくをねばわかと人に見ゆばの里なり ぶかやぶ
しら雲のこなたがなたに立わかれ心とぬさどくなくたひ哉 よしみねの
みられくおまかりける人によみてつかはしける ひで哉か

しら雲のやへにかさなるをちにてもたもはん人にどいろへたつな 貫之
人をわかきける時よめる

わられてふことはいろおもあらずに心にしみてわびしかるかむ
あひしりける人れ。こしのくにまかりて。年へ
て。京おまうできて。又かへりけるときによめる

かへる山幸にすは有てあるかひは來てもまらぬ名ころわりける 躬恒
こしのくにへまかりける人に。よみてつかはし
ける

よろにのみこひやわたらむしら山のゆきのみるべくもあらぬ我身は
音羽山れはどりにて。人をわかるとて。よめる

おどは山こたかく鳴てはどくさす君がわかれをしむべうこ 貫之

わかきてはほをへたつとおもへばやかつみながらにかねて戀しき 在原しげはる
わづまれかたへまかりける人に。よみてつかはし
ける

おもへとも身をわねばめにみぬ心君をたぐへてややる いかこのあつゆゑ
あふさかの關しまさしきものならばあらずわかる君をともめよ なにはのよろづを

から衣たつ日はさかじ朝露のたきてしゆけばけぬべきものを 讀人不知
この歌は。ある人つかさを給りて。わたらしきめ
につきて。年へてすみける人をすて。だい明日
ななたつと。ばかりいへりける時ふ。ともかうも
いはでよみて。つかはしける

ひたちへまかきけるときさ。ふぢはらのきみとし
あよみてつのはしける

あさなげに見べきさきとしたのまねばおもひたちぬる草まぐらこ 龍
されむねさだが。あづまへまかりける時に。人の
家にやどりて。あかつさいでたつとて。まかりや
しければ。女れよみていだせしける

えろしらぬ今こいろみよ命あらばわれやわする人やはぬと 讀人不知
わひしりて侍ける人れ。あづまのかたへまかるけ
るをおくるとて。よめる

雲にもかよふ心のおくをねばわかと人に見ゆばの里なり ぶかやぶ
しら雲のこなたがなたに立わかれ心とぬさどくなくたひ哉 よしみねの
みられくおまかりける人によみてつかはしける ひで哉か

しら雲のやへにかさなるをちにてもたもはん人にどいろへたつな 貫之
人をわかきける時よめる

わられてふことはいろおもあらずに心にしみてわびしかるかむ
あひしりける人れ。こしのくにまかりて。年へ
て。京おまうできて。又かへりけるときによめる

かへる山幸にすは有てあるかひは來てもまらぬ名ころわりける 躬恒
こしのくにへまかりける人に。よみてつかはし
ける

よろにのみこひやわたらむしら山のゆきのみるべくもあらぬ我身は
音羽山れはどりにて。人をわかるとて。よめる

おどは山こたかく鳴てはどくさす君がわかれをしむべうこ 貫之

藤原後蔭か。からものつつかひに。なが月のつこ
もどがたおまかりけるに。うへのをのこせも。酒
たうびけるついでに。よめる

もろどもにききてとせめよきりく。そ秋の別色はをしくやはあらぬ
秋霧れどもに立いて。わかればは色ぬ思ひに。こひやわたらむ
藤原かねもち
平もとのり

源のさねが。つくしへ。湯あみむとてまかりける時
に。山さきにて。わかれをまみける所あて。よめる
ま
ろ
め

いのちだに心あかなふものならはなにかわかれのかなしからまし
山さきよ。神なびのもりまで。ねくりあ。人さま
かりて。のへりがてにして。別をしみけるに。光る
ま
ろ
め

人やりの道なら船たにおほかたは。いさうしといひていざかへりなん
今は。これよりかへりねと。さねがいひけるをり
あよ光る
ま
ろ
め

したはれて来にし心け身にしあればかへるさまには道もしられず
藤原はこれをか。むさしのまけにまかりける時
に。おくりにあふさかをこゆるとてよみける
藤原のかねもち

かつこえてわかきもゆくかあふさかは人だのゆなる名に。ころ有けき
大江のちふるが。こしへまかりける。うまのはな
貫
之

むけに。よめる

君がゆくこしのじらやましらねもゆきのまに。くあどはたづねむ
藤原兼輔朝臣

人の。花山にまうてきて夕さりつかたかへりなん
としける時によめる

夕ぐれのみがさばやまを見へならんよるはこえじとやせりとるへく
遍
昭

山にのぼりて。かへりまうてきて。人々わかれけ
るついでに。よめる

わかれをば山のさくらにまのせてんとせむとめじは花のまに。く
幽仙法師

うりんあんのみこの。舍利會に。やまおれぼりて
かへりけるに。さくらの花はもとにてよめる

やまかせに櫻ふささきみだれなむはなのまされに立とまるべく
ことならば君とまるべくにははなむのへすは花のうきにやはあらぬ
幽
昭

仁和のみかき。見こにおはしましける時に。ふるの
瀧多覽じにおはしまして。かへり給ひけるによめ
る

あらずしてわかるくなみだ瀧にうふ水まるとやしもはみゆらん
兼
法
師

かななまのつばにめしたりける日。おほみきなど
たうべて。雨のいたくふりければ。夕さりまで侍

下。まかりいで侍けるをりふ。さかづきをとりて

貫之

秋ときの花をばあめにぬらせとも君をばまして残したころおもへ

兼覽王

をしむらん人の心をしらぬまに秋のしぐれと身すふりよける

躬恒

わかぬれぞうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきに何を戀まじ

讀人不知

あかすしてわかぬ袖のしら玉は君がかたみとつゝみてすゆく

貫之

かさどなくれもふきみだにうぼちぬる袖はかわかじあはん日までに

貫之

しひてゆく人をとゞせむさくら花いつれを道とまよふまであれ

貫之

まがの山をえにて。石井のもとにて。物ををける

貫之

むすぶてのしづくみこる山此のわかでも人にわかぬるかな

貫之

またのおびの道はがたぐわかるども行めぐりてもあはんとすおもふ

友則

古今和歌集卷第九

羈旅歌

もろこしにて月をみてよめる

あまのはらふりさけみればかすがなるみかさ山にいでし月かも

安倍仲賢

この歌は。むかしなかつまろを。もろこしにお。物な

らはしに。つらばしたまけるに。あまたの年旅へ

て。えかへりまうで。こざりける旅このくにより。

又つかひまかりいたりけるに。たゞひてまうで

きなんとして。いでたりけるふ。めいしうといふ

所の海へ。かのかのくにの人。うまのはなむけ

しけり。よるになりて。月のいとおもしろくさ

し出たりけるをみてよるとあん。かたりつた

ふる。

おきの國にながされける時に船にのりていでたつ

小野篁朝臣

とて京なる人のもとに。つかはしける

わたの原八十島をけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつと船

題しらす

はのくどあかしのうらのあさ霧にしまがくれゆく舟をしりおあふ

此歌は。ある人のいはく。かきのもとの人まろがこ
あつまのかたへ。友とする人。ひとりふたどいざな
ひて。いざけり。三河のくに。八橋といふ所にい
れりけるに。その川のはどりに。かきつとたいと
おもしろうさけりけるを見て。木のかけにあり
て。かきつばあといふ五もじを。句のうしらす
て。たびの心をよまむとて。よめる

からころもきほくまれおしつましあればはるくさぬるたびをしり思ふ業
むさしの國と。しもつふさぐにどの中にある。す
みだ河のはどりにいたりて。みやこれいと戀しく
おほえければ。しばし。川のはどりにおり給て。思
ひやれば。かぎりなくとほくもきにけるかなと。お
もひわびて。ながさをるに。わたし守。はや舟に
れ。日もくまぬといひけをば。舟にのりて。渡らむ
とそるに。みな人。ものわびしくて。京に思ふ人な
くしもわらず。さるをりに。しづき鳥の。はしとあし
とあさき。川のはどりにあわらびけり。京には見えぬ

業平

鳥なりければみな人見しらす。わたし守に。これ
は何鳥ぞとひければ。これせん。みやと鳥とい
ひけるを。きよてよめる

名にしおはほいざことよはむみやと鳥わが思ふ人はありやなしやと
きたへゆく鷹をなくなるつれてこしかすはたらでつかへるべうなる 讀人不知
この歌は。ある人。男女もろとも。人のくにへ
まかりけり哉とて。まのまいたりて。すなはち
身まかりにければ。女ひとり。京へへりける
みちに。あへる鷹の鳴けるをきいて。よめる
なれいふ。

あづまのかたより。京へまうでくとて。道にてよめる
山かくす春のかすみぞうらめしきいづきみやこのさかひなるらん お
こ北の國へまよりける時。しら山をみてよめる
消はつる時しなればこしなるしら山は名は雪に不有ける 躬恒
あぢまへまかりけるとき。道にてよめる
いとよるものならなくにわかれぢの心ぼろくもおもはゆるかな 貫之
かひのくにへまかりける時。道にてよめる

貫之

夜をさむみおくはつしもをばらひつゝ草の枕にわたしびねぬ
たぢまのくみの湯へまかすけるときにふたみの
うちといふ所にとまりて夕さりののれいひたう
べけるに。ともあわりける人々。歌よみけるつい
てによれる

躬 恒

夕づくよおぼつかなき菟玉くしげふたみの浦はわけてころみめ

兼 輔

これたかのみこのともに。かりあまかりける時に。
あまの川といふ所の。川のはとどにおりるて。さけ
なごのみけるついであ。みこのいひけらく。かりし
て。あまのがはらあいたると。あふ心をよみて。さ
るづきわさせと。いひければよれる

かりくらししたなばたつめにやをからむあまのがはらに我はきにけり

業 平

みこ。此歌をかへそくよみつゝ。かへしえせずな
りにければ。とも侍りてよめる。

ひととせにひとたびさす君まてばやをかき人もあらじとぞ思ふ

ありつね

朱雀院の。ならにおはしましける時に。たむけ山

によめる

此たびはぬさもどりあへず手向山もみぢのにしき神のまに

管原朝臣

手むけにはつゝりれ袖もさるべきに紅葉にあけるかみやうへさん
古今和歌集巻第十

素 性

物名

うぐひす

ころかな花のしづくあろぼちつゝうぐひすどのみ鳥の鳴らん

としゆき

はとさす

くべきはとさすきぬきや待わびてなくなる聲れ人をとよむる

うつせみ

涙のうつせみれば玉ぞみたれけるひろはば袖にさるなからむや

しげはる

かへま

たもとより離れてたまをつゝまめやこれなんろれどうはせみんかし

忠 岑

うめ

あなうめふつねなるべくも見らぬ哉戀しあるべき香はあはひつゝ

讀 人 不 知

かにはざくら

かつげども涙のなかあそさぐられてかせふくことにはうきしつじ玉

貫 之

すもゝの花

今いくかはるしなればうぐひすもものはながめておもうべうこ

からむゝの花

あふからもものはなほころかなしけれわかれん事をかねておもへばふかやふ
 たちばな
 あし引の山たちはなれ行雲のやどりさだめぬ世ふころ有けき しげかけ
 をかたまの木
 みよ芝野の吉野の瀧にうかびいづるあわをかたまれさゆとみつらん 友 則
 やまがきの木
 秋は来ぬ今やまがきのききくすよなくあかん風のさむさに 讀人不知
 あふひにかつら
 かくばかりあふひのまれになる人をいかもつらしと思はさるべき
 八めゆゑのちあふひのはるけくはわかづらさあ思ひなされん
 くに
 ちりぬれば後はわくたになる花を思ひしらすもまどふてふ哉 遍 昭
 さうび
 わきはけさうひにすみつる花のいるをあたなる物といふべかりけり 貫 之
 をみなべし
 まら露茂玉にぬくとやさうがにの花にもえにも糸をみへし 友 則
 朝露をわけずばちつゝ花みむと今ぞ野山をみなへしりぬる
 朱雀院のをみなべしわはせの時にをみなへしと

いふ五もじを。句のかしらあおきてよめる
 をぐら山みねたちならし鳴しかのへにけん秋をしる人すあき 貫 之
 さちかうの花
 あさちかう野わなりにけししら露のおける草ばも花かはり行 友 則
 しをに
 ふりはへていざふるさとの花みむとこしをにはひぞうつろひにける 讀人不知
 りやうたんのさき
 我やどの花ふみしたくとりうたひのはなければやこしもくる 友 則
 をばな
 ありとみてたのむすかたさうつせみの世をばなしとや思ひなしてん 讀人不知
 けにをし
 うちつけにこしとや花の色をみむおくしら露の流るばかりを やまべれ名實
 二條后。東宮のみやす所と申ける時に。めどあけ
 づり花さけりけるをよませ給ひける 康 秀
 花の木にあらざらめども咲にけしふしあしこのみなる時もがな
 しれふぐさ
 山たのみつねにあらしのふくさとはにはひもあへず花ぞちりける 紀としさた
 やまし

ほととぎすみねに雲にやまじりありとはきけを見るよしもなき 平 敦 行
 うちせみのからはきことあどむれをたまのゆくへをみぬを悲しき 讀 人 不 知
 ぬば玉の夢になにかはなぐさまんうつにだにもあかぬ心を ぶ か や ぶ
 はなのいろはたいひとさかりをけれをもかへすく不露はるめける たのむこの
 命とて露をたのむにかたけをばものわびしらに鳴野へのむし し げ は る
 さよふけてあかばたけゆく久かたの月ふきかへせ秋のやまかせ かげのりの王
 けふりたちもあともみえぬ草のはをたれかわらびとなつけるめけん しんせい法師
 いさゝめおとせまつまにすひはへぬる心ばせをば人にみえつゝ き の め の と
 なま なつめ くるみ
 わぢきなしなげきのなつめぞうきとにあひくるみをばそてぬ物から 兵 衛
 からこといふ所にて。春の立ける日よ来る

波のおどけけさるることお聞ゆるは春のしらべやあらたまるらん 安倍清行朝臣
 かぢにあたる涙たまづく残春なればいかゞささちる花と見さらむ かねみのおほきみ
 かのかたにいつからさきにわたるけん涙路はあともものこらさどけり あはれ恒躬
 涙の花おきからさきて散くゆり水の春とはるせやなすらん 伊 勢
 うば玉れわがくろかみやかはるらんかみのかげにふきるしら雪 貫 之
 よどがは
 わし引の山へにをればしら雲のいかにせよどかはるゝときさき
 夏草のうへはしげきるぬま水のゆくかたれなき我ころかな 忠 岑
 秋くれを月のかつらのみやはなるひかまを花とちらすばかりを 源 は せ こ そ
 花ごどにあかすちらしし風なれといくすばくわがみしどかはおもふ 讀 人 不 知
 はるがすみながし すみながし し げ は る

おき火
 流れいづるかたいにみえぬなみだ河おきひんときやうこはきられん みやこれよしの
 ちまき
 れちまきのねくれておふるなへあれどわたるはあらぬたのみとぞ聞 大江千里
 はをばしめる。をばてよて。あが先をかけて。とま
 の歌よめと。人のいひければよめる
 はなのあかめにあくやとて分ゆけは心ぞともにもちりぬへうさる 僧 雪 實

古今和歌集巻第十一

戀歌一

題しらす

はとしきすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉 讀 人 不 知
 音にのみさくのしら露よるはあきてひるは思ひにあへずけぬべし 素 性
 よし野河の浪高く行水はやく人をおもひろめてし 貫 之
 しら浪のあどあきかたあゆく舟も風すたよりのしるべなきける 藤 原 勝 臣
 ひとば山おとにきつゝあふさかの關のこなたに年をふるかな 元 方
 立かへりあはれど思ふよろにても人に心をあきつしらす 貫 之
 世中はかくころ有けれ吹かせのめにみぬ人もこひしかりけり 貫 之
 右近のうまばのひをりの目。むかひにたてたどけ 業 平
 る車の下すさたきより。女れかほの。ほのかに見 業 平
 えければ。よみてつはかしける 業 平
 見ずもあらずみせぬ人の戀しくはあやなくけふやながめくらさん 業 平
 するしらぬ何かあやなく分きていはん思ひのみこころしるべなりけれ 讀 人 不 知
 うすがのまつりあまかれりける時に。物見は出た 讀 人 不 知
 りける女のもとに。家をたづねて。つかはせりける 讀 人 不 知

春日野に雲まを分ておひ出くる草のはづかお見えしきみはも

思 之

人れ。花づみしける所にまかりて。まこなりけ

山ざくら霞のまよりほれかにもみてし人ころこひしかりけれ

題しらす

貫 之

たよりあもわらぬ思ひのわやしきわ心を人につくるなりけり

初鴈のはつらに聲を聞まより中空のみの物をおもふかな

あふことは雲のはるかになる神のおとに聞つゝ戀わたるかな

かた糸をこきたかなたによりかけておはすは何を玉のをにせむ

夕ぐれは雲れきたてに物す思ふあまつ空なる人をこふとて

かりこもの思みたれて我でふと妹しるらめや人しつげすば

つれもなき人をやねたぐしら露のおくとはなげきぬとはしのぼん

ちはやふるかものやしるのゆふだすきひと日も君をおけぬ日となし

我戀をむなしき空にみちぬら思ひやをども行かたもあし

するがなるたさのうら涙たぬ日はあきとも君をこひぬ日わなし

夕づくよさすや思への松のはないろともわかぬこひもするかな

足引れ山下水のてがくれてたきつ心をせきすかぬつる

はし野河にはきりどほし行承のおとよはたてと戀はしぬとも

も 之 貫 人 不 知 射 恒 之

たきつ世の中にもよどはありてふをなどわが戀の淵せともあき

山高み下行水のしたにのみ香がきてこひんこひはしぬとも

思ひいつるどきこの山の岩つゝしいはねばころわれ戀しき物を

人しれす思へばくるし紅のすあつむ花のぬらあいてなむ

秋の野のをは赤にましり咲花の色にやこひんあふよまをなみ

わがうの、梅のはづえに驚れねになきぬべき戀もするかな

あし引の山郭公わがこどや君にこひつゝいねがてにする

夏な色ばやどふすふるかや火のいつまで我身下もえにせん

戀せじとみたらし河にせしみをき神はうけすぞなりにけらしも

わはれてふことだになくばなにをかは戀のみだ色のつかねをにせむ

思ふにとしのふるこどすまけにけるいろには出じとあも念しものを

我戀は人しるゝめやしきたへは枕のみころしらばしるら先

淺ちふのをのし原しのふとも人しるらめやいふ人あしあ

人しをぬ思ひやなぞあしかきのまぢるけきとも逢よしれなき

おもふともこふともあはむものなれやゆふてもたゆくとくる下ひも

いで我を人などがめず大ふねのゆたのたゆたに物おもふころす

いせのうみに釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

伊勢の海の蟹のつりあは打へてくるしとれみや思ひあたらん

涙河なになかみをたつねけんもの思ふとき我身なりけり
たねしあれば岩にも松はおひにけり戀をしてひばあはざらめやは
朝な／＼たつ河霧の空にのみうきか思ひのある世さどけり
わすらるゝ時しなけきばあしたづれおもひみだれてねをのみろなく
から衣ひもゆふぐれになる時はかへす／＼人はいひしき
よひ／＼にまくらさだめむかたもなしいかおねしよか夢にみねけむ
こひしきに命をかふる物ならばしおはやくすあるべかりける
人の身もならばし物をあはずしていざ心みんこひやしぬると
しのふればくるしき物を人しれす思ふてふことたれにかたらん
こむ世にもはやなりならむめれまへにつれなき人を昔と思はん
つれもなき人をこふとて山びこのこたへする迄なげきつるかな
行水に敷かよまもはかなきはおもこぬ人をおもふなりけり
人をおもふ心は我にあらねばや身のまをふだにしらきさるらん
おもひやるさかひはるかになまやするまどふ夢路にあふ人のなき
夢のうち逢みむとをたのみつ／＼くらせるよひはねんかたもあし
こひしねとするわざならしうは玉のよるはすがらふ夢に比えつ／＼
泪河まくらながるゝうきねおは夢もさだらに見へすぞ有ける
こひすれば我身はうけとなりけりさりとて人にもはぬもれゆゑ

かゞり火にあらぬわが身のなすもかく涙は川にうきてもゆらむ
かゞり火のかげとなる身のわびまきはながきて下にもゆるへけり
はやさせにみるめおひせば我袖はなみだの河にうゑまじ物を
おさへにもよらぬ玉藻の浪はうへにみだきてれみや戀渡りなん
あしがものさわぐ入江のしら波のしらすや人をかくこひんとは
人しれぬ思ひをつてあするがなるふじの山こそ我身なりけれ
とふ鳥の聲もきこへぬおく山のふかき心を人はしらなむ
あふ坂はゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしきねのみなくらん
逢坂の關にさがるゝはし水いはで心あふもひこすれ
うき草のうへはしげれるぶちなまきやふかき心をする人のなき
打わびてよば／＼ひこゑに山彦のこたへぬ山はあらじと思ふ
心かへするものにもがれた戀はくるしき物と人にしらせむ
よろにしてこふればくるしいれ紐のおなじ心あひさむすびてん
春たてば消る氷の残りなく君がこゝろはわれにとけなん
わけたてば蟬のをりはへなきくらしよるは螢れもえこそ渡れ
夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてあまけり
夕さればいと／＼ひがたきわが袖に秋の露さへおきろはりつ／＼
いつとも戀しらすわあらねども秋のゆふべはあやまかりけり

秋の田のほにこそ人をこひさらめなをか心あわすれしもせん
あきの田のほのうへをてらすいなづまのひかまのまにも我や忘るも
人先もる我かはあやな花すきなきかほお出で戀すしもあらん
あわ雪のたまをばかてあくだけつし我物思ひのしげきころ哉
かく山のすがのねしれさふる雪のけいどらいはむ戀のしげきる
古今和歌集卷第十二

戀歌二

題しらす

思ぬひつゝぬをばや人のみつらむ夢としりせばさ先ざらましを
うまゝねにこひしき人を見てしよりゆれてふ物はたのみろめてき
いとせめてこひしき時とらば玉のよるに衣をうへしてぞきる
秋かせの身にさむければつれもなき人をぞ願ひくる夜ごとに

小

町

しもつゝも等に。人のわざしける日。しんせい

素

性

法しのたうしにて。いへりけることばを。歌によ
みて。そのいこまぢがもとにつのはしける

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみねめれなみだなりけり

清

行

かへし

おろかなる涙を袖に玉はあを我はせさあへすたさつせなれば

小

町

寛平御時。たさいの宮の歌合のうた

戀わびて打ぬるなかに竹かよふ夢のたぢはうつ、ならあむ
そみれ江のさしあふる浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよくらん
わが戀はみやまがくれの草なれやしげきまされせしる人のなき
よひのまもはかなくみゆる夏虫にまきひまされる戀もそるかな
夕されば益し受けあもゆれどもひかまねばや人のつれなき
さ、のはにふく霜よりもひとぬるわが衣手ぞさえまさりける
我宿れさくのかさねたかく霜の消るへしてぞこひしかりける
河のせになびく玉藻れみかくれて人あしらぬ戀もするかな
かさくらしふるしら雪の下さえにさえて物思ふ比にもある哉
君こふる泪のどにみらぬればみをつくしとぞ我はなりなる
しぬる命いさもやすむと必みに玉のをばかまあはんといはなん
わびぬればしひて戀んと思へとも夢といふ物を人だのめなる
わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらばわすれん
戀しきにわびてたましをまよひなばむなしきからの名にや残らん
君こふるし涙なくくばから衣をねのわたりはいろもえあまし

俊

行

友

則

忠

せ

忠

せ

讀

人

貫

之

題しらす

よと、もにながれて予ゆく涙河ふゆるこほらぬみあわなりけり

夢路にも露やおくらむはるすがらかよへる袖のひぢてかわかぬ
 はかなくて夢にも人をみつるよはあしたの床をささうありける
 偽のなみだなればからこるもしのびに袖をしぼらざらまじ
 ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖とどはこたへむ
 わがこどく物やよなしははとさす時ぞともなく夜たゞなくらん
 さほき山梢をたかみはとさすなくね空なる戀もするかな
 秋霧ははるゝ時なきこゝろにはたちの空もおもはえなくあ
 りしはこどくをたてしはなかねども涙のみこころ下にながるれ
 是真みこの家の歌合のうた

題しらす

あきの野にみたまて咲る花の色のちぐさに物と思ふころかな
 ひどりして物をおもへば秋の田のいなばのうよといふ人のあき
 人と思ふ心はかぢにあらねども雲のはのみもなきわたるかな
 秋かせにかさなすことこのゑにさへはかなく人のこひまかるらむ
 まこもる涙のさは水雨ふればつねよりこどくまざるわが戀
 こゑぬまはよし野の山のさくら花人づてにのみさしわたるかな

素 藤原のたふた 性
 千 里 行
 俊 之 行
 貫 恒 之 行
 躬 恒 之 行
 貫 恒 之 行
 忠 恒 之 行
 貫 恒 之 行
 貫 恒 之 行

やまひばか泣に。物のたうびける人のもとあふ又人
 まかきて。せうろこすと開て。よみてつかはしける
 露ならぬ心を花あさうめくかせふくごどに物思ひぞつゝ
 題しらす

わが戀にくらぶの山のさくら花まなくちるとも数はまさらじ
 冬河せうへはこほれる我なれや下ふながれて戀わたるらん
 たきのせにねざしとめぬうき草のうきたる戀も我はする哉
 よひくゝにぬき玉我ぬるかり衣かけて思ふぬ時のまもなし
 東路のさやの中山なかくゝに何しか人をおもひうめけむ
 したたへの枕の下に海はあれを人を見る先はひすぞ有ける
 年茂へてきえぬ思ひは有赤がらよるの涙はなほこほりけり
 わが戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心すわびしかりける
 紅のふり出つゝなくなみだにはたもとのみこころいろまさりけれ
 しら玉と見えし涙も年ふればから紅にうつるひにけり
 夏むしを何かいひけん心から我もおもひにもえぬべうえ
 かせふけばみねにわかるゝしら雲のたえてつきなき君が心か
 月かけあわが身をかふる物ならばつれなき人もあはをどやみむ
 戀しなばたが名はたいし世の中の道なきものといひはなすとも

是 ぬをかの 則
 忠 則 峯 則
 友 則 峯 則
 貫 之
 躬 恒 之
 忠 恒 之
 忠 恒 之
 忠 恒 之

こりすまに又もなき名をたちぬべし人にくらぬ世にすまへば
ひんがしは五條わたりに。人をしりおきて。まかり
かよひけり。しのびなる所なりけきば。かきよりし
も。えいらで。かきれくづれよりかよひけるを。た
びかさなりければ。あるじきつつけて。あは道に。
夜ごどに。人をふせて。まもられば。いさげれど。
えあはでのみかへりてよみてやりける

題しらす

しのみきを戀えき時はあし引れやまより月のいでてころくれ
こひくつてまににこよひすあふ坂のゆふつけ鳥は鳴すもあらなん
秋のよも名のみなりけきあふといへばこどすともなく明ぬる物を
ながしども思ひうはてぬむかしよりあふ人がらの秋は夜なれば
しのゝ矢のはがらくとあけゆけばあのがきぬくなるすわびしき
わけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひうふらむ

寛平御時。ささいの宮の歌合のうた

明ぬとてかへる道にはこきたれて雨もなみだもふりうぼちつゝ
題えらす

業平 業平 貫之 小町 射恒 讀人不知 藤原國經朝臣 俊行

しれいめれわあれをしみわれぞまつ鳥よりさきに鳴はじめつる
はとぎす夢かうつゝかあさ露のおきてわあれしあかつきのころ
玉くしげあけば君が名立ぬべき夜ふかくこしを人見けんかも
けさはしもおきけんかたもしらさうつ思ひ出るぞ消てかなしき
人にあひて。あしたに。よみてつらはしける

業平朝臣。いせれ國にまかりたりける時。齋宮

ねぬる夜の夢をとかきみまをちめばいやはかなにもなりまざる哉
なまける人に。いとみろかにあひて又のあした
よ。人やるすべなくて。思ひをりけるあひだに
女のもとより。おこせたりける
君やこし我や行けむおほはえず夢かうつゝかねてかさたてか
かきくらす心のやみあまをひにきゆえうつゝとは世人さだめよ

かへし

題しらす

ぬば玉れやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり
さよ更て天のどわたる月かげにあかすも君をわひみつるかあ
君が名もわが名もたてしなにはなるみつともいふなわひきともいてじ
名取河せ々の埋木あらはればぬかにせんとかあひ見ろめけん

龍人不知 千里 業平 讀人不知 業平 讀人不知

よしの河水の心はやくともたきのおとにはまてじと思ふ
戀しくはしたにを思へむらさきのねすまの衣いろあいつなゆめ
花すゝきはにいでこひは名をくしみ下ゆふひものむそはれつゝ

まちはなのきよきが。しのびに。あをしれりける
女のもとより。おこせたまける

思ふとちをとりくが戀しなばたきおよろへてふぢころもきむ
かへし

泣こふる泪に袖のそばちなばぬぎかへがてらよるころはきめ
題しらす

うつにははさもころあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしき
かぎりなき思ひのまゝおよるもこむ夢ちをさへに人はどがめじ

夢路にはあしもやすめすかよへともうつゝあひと先見しことはあらず
おもへとも人めづゝみのたかければかはと見あがらえころわたらね

たきつせのはやき心を何しかも人めづゝみのせきどがむらむ
寛平御時。ささいのみやの歌合の歌

紅のいろにはいでじかくきぬのしたに。あよひてこひはしぬとも
題えらす

冬の池にすむにはどりのつれもなくろこに。あよふと人にしらすな
躬

をのゝはるかせ

讀人不知

たちばなの
きよ

小町

讀人不知

女

躬恒

さかにはおく初霜のよををむみしみつくととも色にいで光や
山じなのおとこのやまのおとにだに人のしるべくわがこひめやも

このうた。ある人。あふみのうねめのとななすす

みつしほのながれひるまをわひがたみみるめれ雨によるを社まで
しら河のしらすともいはじろこ清みあがれてよくにすまんど思へば

下にのみこふればくるし玉のをのたえてみたきん人などがめず
わが戀を忍びかねては足引の山たちばなの色に出ぬへし

おほかたを我名もみなどとき出せんよをうみべたにみるめすくなし
まくらより又しる人もなき戀を泪せきあへすもらしつるかあ

風ふけば涙うつさしの松なまやねにあらはれてあきぬべう也
この歌は。ある人のいはく。かきのもとの人まろ

かこ

池にすむ名をくま鳥のを水をあさみかくるとすれをあらは色にけり
あふことは玉のをばかり名のたつはよし野の河のたきつせのこと

ひら鳥のたちにしわがな今さらることなしふともしるしあらめや
君よりわが名は花は春霞野にも山にもたちみちにけり

しるといへばまくらだにせでねしものをちりならぬ名の空に立らん
古今和歌集巻第十四

讀人不知

ふかやぶ

友貞

讀人不知

讀人不知

讀人不知

勢

戀歌四

みちのくのあさかればぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ
 おひみずは戀じきこどもなからましおとあう人を聞べかりける
 いろのかみふるは中道ながくはみずはこひしとあはまじやむ
 君といへば見まれみずまれふじのねのめづらしげなくもゆるわが戀
 夢にたふみゆとは見えじかさなく我おもかげにはづる身なれば
 石問ゆく水のしら涙たちかへてかくころはみめあかすも有哉
 いせのあまは朝な夕なにかづくてふみるめお人をあくよしもかな
 春霞たなびく山のさくら花見れともわかぬ君にもあるかな
 心をうわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しむるべき
 かれはてむ後後ばしらで夏草のふゆくも人のおもほゆるかな
 あそか河ふちは瀬になる世なりとも思ひうめてむ人はわすれし
 おもふてふことのはのみや秋をへて色もかはらぬ物に之あるらむ
 題しらす
 さむしちに衣かたしきこひもやわれを待らんうちはし姫
 又は。うちのたまひ光

讀人不知
 貫之
 藤原たゆき
 伊勢
 讀人不知
 友則
 ふや
 躬恒
 讀人不知

君やこむ我やゆかひのいざよひに楨の板戸もさすねにけり
 今こむといひしばかりに長月の有明の月を待いでつるかな
 月夜よま夜よしと人にほけやらばこてふに似たりまたすぢもあらず
 君こそすはねやへもいらじこむらさき我もとゆるに霜をかくとも
 みやぎのいもどあらのこはぎ露をおもみ風を待てと君を社まて
 わな戀し今もみてしが山腰の垣はにさけるやまどなでして
 つの國はなふはおもはず山しろのとはにあひみむをのみころ
 しきしまのやまどにはあらぬから衣さるもへすしてあふよしもあな
 戀しどはたが名づけんことあらんしぬとすたにいふべかまける
 みよし野の大かはのべのふぢあみのなみにおもはばわがこひめやは
 かくこひむ物とはわれもおもひにき心のうちをまさしかりける
 天の原ふみとべろかしあるかみも思ふなかをばさくるものかは
 あづさ弓ひさ野のつら末つひにわがおもふ人にこそれしげん
 此れ歌は。ある人。あめのみかどれ。あふみのうね
 先に。たまひける。どなんす
 夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくとも絶んと思ふな
 この歌は。あへしによみて奉りけるとなむ
 里人れことは夏野のしげくともかれゆく君にわはざらめやは

素性
 讀人不知

貫之
 ふかや
 讀人不知

藤原敦行朝臣。のなりひらの朝臣に家なりける女
をわひしりて。ふみつかはせりけるとばに。いま
いふでく。あめのふりける残なむ。みわづらひ侍
と。さ。うけるをまきて。かの女にかはりて。よみ
りける

かすくにおもひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりすまされる

業 平

ある女の。なりひらの朝臣を。とこそきだめず。あ

りさそと思ひて。よみてつかはしける

大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へどぬころたのまじりけれ

讀 人 不 知

るへし

おほぬさと名おころたてきながれてもつひによるせばありてふ物を

業 平

題しらす

須广のあまの盤やくけふ風をいたみ思はぬかたにたな引にけり

讀 人 不 知

玉かづらはふ木あまふになりぬればたえぬ心れうれしけもなし

たがさどによがきをしてかほとくすすた。こ。にしもねたるこそする

いで人はここのみすよきつ草のうつし心わいらことにして

いつはりれなき世なせばいかばかり人のことのはうれしからまし

偽とおもふものから今さらたがまことをかわればたのまん

秋かせにやまのこのはのうつろへば人のこころもいかとぞおもふ

素 性

寛平治時。ささいの宮の歌合のうた

蟬のこゑきけばかなしな夏ごろもうすくや人のならむとおもへば

友 則

題しらす

空蟬は世の人ごとのしげればわすきぬものしれぬべうなり

讀 人 不 知

わかでころ思はむ中ははなれなめろをだに後のしれがたみに

わすれなむと思ふ心のつくらる有しよまけあまつぞのなしき

忘きなんわををうらむなほとくす人の秋にはわはむとせす

たえずゆくあすかの川のよきみなば心あるとやひとのおもはむ

この歌。ある人のいはく。なかとみのあづま人の

歌

よき河のよとひと人はみるらめどながれてふかき心ある物を

そこひなき淵やはさわく山河のあさきせにころわだ浪はたて

紅のはつ花すめのいろふかく思ひしころわれわそれ先や

みちのくれしのふもちすたれ故にみだきんと思ふ我あらずに

思ふよりいかにせよどか秋かせになびく淺ぢのいろことなる

ちとれいろにうつろふら先としらなくに心しあき紅葉ならねば

海人のすむ里のゑるべにあらなくにうらみんどのみ人のいふらむ

小 町

素 性
讀 人 不 知
かばらの右大臣
讀 人 不 知

くも日影としなれる我なきは然にこそみえぬ身をばはなれずね
いろもなき心を人にうめしよりうつろはむとはおほはななくに
死づらしき人をみむとやしかもせぬわが下紐のどけわたるらむ
あげらふのうれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖すぬれぬる
ほり江こぐたなくしに船こぎかへりおなじ人にや戀わたるなん
わたつ海とあれにし床を今さらふはらはは袖やあわとうきなん
いふしへふなほたちかへる心かなこひなきことに物わすれせて
人をしむればにわひしりて。あひかたたくありけれ

下野せむね
貫 之
讀 入 不 知
伊 勢
貫 之

ば。うのいへのわたを。まよりありきけるをり
に。雁れ鳴を聞て。よみてつかはしける

黒 主

思ひいでし戀しき時ははつ雁のなきてわたると人しるらめや
右のねはいまうちきみ。すまますなりにければ。か
の。むかしおこせたりける文を。とまわため
て。返すとてよみておくりけるたの死こし
このはらはよへしてむ我身ふるければおきどころなし

典侍藤原
よる か

かへし

今はとてかへしことればひろおきてれのが物からかたみとやみむ

近院右大臣

題しらす

玉ぼこの道はつねおもまはなむ人をとふともわきかとおもはむ
まてといとねてもゆかなんしひて行駒のあしをまへのたなはし
中納言源の鼻の朝臣の。あふみのすけに侍ける時
に。よみてやれしける

よる か
讀 人 不 知
閑 院

あふ坂のゆふつけ鳥ああらばこそ君がゆきくをなくくもみ光
廻しらす

伊 勢
寵 勢

ふるさどにあらぬ物からわが爲に人のこころのわれてみゆらむ
山がつかさほにはへる青つらら人はくれぬもことつてもあし
大ぞらは戀しき人のかたみかえもの思ふことよながめらるらん
あふまでのかたみも我は何せむに見ても心のあぐさまなくに

讀 人 不 知
寵 勢

おやのまもりける。人のむすめは。いと忍びにあ
ひて。ものいひけるあひだに。おやのよぶとい
ひければ。いろきりへるとて。もをなん。ぬきお
きて入あける。うの。ち。袋をうへそとて。よ光

る

あふまでのかたみとてころと。光けめ涙にうかぶもくづなまけり

おきかせ

題しらす

あたまころ今はわたなれこれさくはわせる。ときもあらまし物を

讀 人 不 知

古今和歌集卷第十五

戀歌五

五條のきさいの宮の。西のたいに住ける人に。ほ
いにはあらで。ものいひわたりけるを。む月の十
日あまりになむ。はかへかくれにける。あり所は
開けれ。えものもいはで。又のとしは春。梅は
花さかりに。月のおもしろか。置ける夜去年を。こ
ひて。かの西のたいにいきて。月のかたふくま
て。あばらなる板しきにふせりて。よめる

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわが身ひとつはもとの身にして
題しらす

花すゝき我ころしたに思ひしかほにいでて人あすむばれにけり
よるおのみさかまを物をおとは河わたるとなまにみなれうめけん
わがこどく我をおもはん人もかきさてもやうきと世をこころみん
久かたの天つそらにもすまかくに人はよろにみれもふべうなる
見ても又またも見まくのほしければあるを人はいとふべうあり
雲もなくなきたるあさは我なれやいとほきてのみよをばへぬらん
花がたみめならふ人のあまたあればわすられぬらむ数ならぬみは

業平

藤原仲平朝臣

藤原兼輔朝臣

もどあ恒

読人不知

友則

読人不知

読人不知

うきめのみおをて流るうらなればかりにのみころあまはまるらめ
あひにあひて物思ふころのわが袖にやせる月さへぬるがほなる
秋ならでおくしらのゆはね感をわが手枕のしづくなまけり
すまは蟹のしほやき衣ををあらみまほはにわれや君がきまきぬ
山しろの淀れわかこもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき
あひみねば戀ころまされみなせ河赤にたふらめて思ひろめけむ
曉の鳴ればねがきもはがき君がこぬよは我ぞのづかく
玉かづら今はたゆとやよく風のおとにも人のきこへざるらむ
わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこころに秋やきぬらん
山のゐのあさき心もねもはぬにかげばかりのみ人れみゆらむ
忘草たねとらましを逢事のいとかくのたきものとしりせば
こふをともあふよれなきはわすれぐさ夢路にさへやあひしけるらむ
夢にだにあふことかたくなりゆくはわれやいをねぬひとやわそる
もろこしも夢にみしるば近かりき思はぬ中ずはるけか置ける
ひとりれみながめふるやのつまされば人をしのぶの草をおひける
わが宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに
今こむといひてわかきまわしたより思ひくらしのねをのみぞなく
こめやとは思ふ物からひくらしの鳴ゆふぐればたちまたれつ

伊勢

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

読人不知

いままはとわびにし物をさぶが衣にあり我我たのむる
 今ほことおもふものからわすれはしまたることのもたもやまぬの
 月よあはこぬ入またるかきくも雨もふらなんわびつゝもねん
 うゑていにし秋田かるまで見えこねばけき初雁のねにぞ鳴ぬる
 こぬ人をまつ夕ぐさの秋かせはいかにふけばらわびしかるらむ
 ひさしくもなりにけるかな住のえのまつはくるしき物にぞ有ける
 住れえのまつほど久にならぬればあしあづのねに鳴ぬ日はなし
 仲ひらの朝臣。あひしりて侍けるを。かれがたに
 なりにけきは。ちくが。やまどのかみに侍けるも
 どへまかるとてよみてつかはしける
 みわの山いかに待みむ年ふともたづぬる人もあらじとおもへば
 題しらす
 伊勢
 吹まよふ野風葉さむみ秋はぎれうつもゆくか人のこゝろの
 今とどてわが身時雨にふりぬればこのはさへにうつろひにけり
 人を思ふ心木のはにあらばこゝろ風のままに。ちりもみだら
 なりひらの朝臣。さのありつねが。むすぎに侍け
 るを。うらむるとありて。しばしのあひだ。ひる
 雲井院のみこ
 小町
 をのゝさだき

は。さて。ゆふさきりは。かへりのみしければよみ
 てつかはしける
 あま雲のようにも人のなりゆくかさすがみめには見ゆる物から
 返ま
 題しらす
 業平
 ゆきさへり空あのみしてふることはわがる山のかせはやみな
 から衣なれば身にこそまつはれ光かけてのみやはこひんと思し
 秋かせは身を分てしもふかなくに人のこゝろは空になるらむ
 つれもなく成ゆく人のことのはす秋よりささの紅葉へける
 こゝちふこなへりけるころ。あひしりて侍ける人
 の。とはで心ちおこたりて後。とふらへりければ
 よみてつかはしける
 兵衛
 しでの山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまつこえとて
 あひしれりける人の。やうやくかれがたになりけ
 るあひだに。やけたるちのはに文をさして。つか
 はせりける
 時過てかれゆく小野のあさぎに。今はおもひろたえすもえける
 物思ひけるころ。ものへまかりけるみちよ。野
 こまらがあね

火のもねけるを見て。よ光る
冬がれの野べとわが身を思ひせばもえても春をまたまし物を
題しらす

伊勢

水のあわの消てうき身といひながらながれて猶もたのまるゝかな

友則

よし野川よしや人ころつらからめはやくいひてしとはわすれじ

読人不知

世の中の人のころははなぞめのうつろひやすき色に有ける

読人不知

ころこそうたてにくけさうめさらばうつろふこともをしからましや

小町

色みえてうつらふものは世の中の人のころの花にふあまける

読人不知

我のみや世をうぐひすとなきわびん人の心の花とちりあは

読人不知

おもふともかきなん人をいかせむあかすちりぬるはなところみめ

読人不知

今はとて君がるれあはわが宿の花をばひとりみてやしのばん

読人不知

わすれ草かれもやせるとつきもなき人の心に霜のおかなん

読人不知

忘草何をかたねを思ひしはつきなき人のころありけり

紫性

秋の田のいねてやこどもかけなくになにをうしどか人のかるらむ

読人不知

はつ雁の鳴ころわたれよの中の人このころはあさしうければ
あはれともうしとも物を思ふときなき涙のいとながるらむ
身をうしと思ふにきぬものなればかくてもへぬる世に社有けれ
蟹かかる藻にすむ虫のわれからどねをころな光世をばうらみじ
あひみぬもうさも我身のから衣思ひしらすもとくるひもかな
寛平御時。ささきの宮の歌合のうた
ほれなきを今は戀じと思へどもころよわくもおつるなみだか
題しらす

寛之
讀人不知
典侍藤原直子御
い直子御
すがのいおん

人しれすたえかましかばわびつゝもなき名をどだにいばまし物
うれをだと思ふことしてわが宿をみきとないひろ人のきかくに
あふことのもはらたえぬる時にころ人戀しきこともしりけれ
わびはつる時さへものゝかなしきはいつこをしれふなみだなるらむ
うらみてもいはむかたぞなきかみみみゆる影ならずして
夕ざれば人なきとこをうちばらなげかむ爲となれるわが身の
わたつみのわが身をすなみ立かへるあまの住てふうらみつるかな
わらをたをわらすさるへしかへしても人の心を見てころやまめ
ありうらみの濱のまやとたの光しはわするゝことの數ふぞ有ける
あしへより雲をさして行雁といやとほさかるわが身かなしも

伊勢
讀人不知
かきかせ
讀人不知

しぐれつゝもみづるよりもこのはの心は秋あふふねびしき
 秋かせれふきとふきぬるむさし野はなべて草ばの色かはりけり
 秋風あふたれみこそかなしけれわが身むあしく來ぬと思へば
 あきかせの吹うらがへすくすははのうらみても猶うらめしきか
 秋といへばよろにぞ開しあだ人の我をよるせる名に社有けれ
 わすらるゝ身をうぢはしの中たえて人もよはぬ年々へにける
 又はこなたのあたに人もかよはず
 あふことをながらの橋のながらへて戀わたるまに年ぞへにける
 うきあがらけぬる淡とも成ならむあがれてとだあたのまれぬみは
 なかれてはいもせの山のなかにあつるよし野の河のよしや世の中
 古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもろこの身まかりけるときよみける

なく涙雨とふらなわたり河水まさりなばかへまぐるがに

さきのおほきおほいさうち君を。しら河のわた

りにあぐりける夜よめる

ちの涙おちてたさつしら河は君が世までれ名にこり有けり

ほりかはのおほきおほいさうち君。みまかり

小 町
 さ だ ぶ
 讀 人 不 知

是 則
 友 則
 讀 人 不 知

篋
 素
 性

にける時に。ふか草の山に。をさめてける後に。
 よみける
 空蟬はから茂みつゝもなぐさめつ深くさの山けふりたにたて
 深草の野への櫻し心あらばことしばかりは墨染あさけ

藤原敦行朝臣のみまかりける時に。よみてかの
 家につかはしける

ねてもみゆねでもみてけりおほかたはうつ蟬の世を夢には有ける

あひしれりける人の。みまかりにければ。よめる

夢どころいふべりけれ世の中あうつゝあるものとおもひけるかな

あひしれりける人の。みまかりけに時によめる

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とはみず

あねのみまかりけるときよめる

瀬をせば淵となりてもよきみけり別をとむるしらがみずなき

藤原のたいふさが。むかしあをしめて侍けり人の。

みまかりにける時。とふらひあつかとすとて。

よめる

さきだぬくいのやちたびかなし死となかるゝ水のかへりこぬな

紀友則が身まかりける時よめる

僧 都 勝 延
 か む つ け の
 み つ ね を

友 則

貫 之

忠 岑

閑 院

ぬすしらぬわが身と思へどくれぬまのけふは人ころかなしかりけれ
時しもあれ秋や之人のわかるべきあるをみるだに戀しきものを
忠 貫

神無月まぐれにぬるもみぢははたいわび人のたもねなまけり
ちうがおもひにてよめる
躬 恒

ふぢ衣はつるゝ糸はわび人のなみたれ玉のをとぞなりける
おもひ侍ける年の秋。山寺へまかりける道にて
よめる
忠 貫

朝露のおくての山田かりろめにうき世の中を思ひぬるかな
思ひに侍ける人哉。とふらひおまかりてよめる
忠 貫

すみ染の君がたもど雲なれやあえず涙の雨とのみふる
女はおやれおもひにて。山寺に侍けるを。ある人
のとふらひつかはさりければ。返事によめる
忠 貫

あし引の山べにいまはすみぢのころもの袖のひる時もなま
跡闇のとし。池のはどりの花を見てよめる
讀 人 不 知

水のおもにしつゝ花の色さやかに君がみかげのおもほゆるかな
深草のみかどの國忌の日よめる
安 簞

草深き露のたにいかげかくしてゐる日のくれしけふあやはあらぬ
安 秀

忠 貫 忠 貫 躬 恒 忠 貫 讀 人 不 知 安 簞 安 秀

ふか草のみるきの時時に。藏人の頭にてよめるひ
るなれつかうまつりけるを。跡闇にありにけ色
ば。さらば。世にもまじらすして。ひえの山にの
ほりて。かしらおろしてけり。うのまたのとし。
みな人。ゆふくぬぎて。あるはうらぶりたまはり
など。よろこびけるをきよてよめる

みな人之花のころもになりぬなりけの袂よかわきたにせよ
遍 昭

河原のおほいまうちさみのみまかりての秋。かの
家のはどをまかりけるに。紅葉の色。またふが
くもならざまけるをみて。かの家に。よみていれ
たりける

うちつけにきびしくもあるか紅葉はもぬしなきやと色なかりけり
藤原のたかつねの朝臣の。身まかりての又のとし
の夏。ほどしきすれ鳴けるをきよてよめる

郭公けさなくこゑにおどろけば君に別れし時に有ける
さくらをうゑて有けるにやうやく花ささぬべき
時に。かのうゑける人身まかにければ。その花
を見てよめる。

近 院 右 大 臣 貫 之

花よりも人こそうわたに赤くにけれいつれをさきにこひんどか見し
ある七身まかりにける人の家の。梅の花を見てよ
める

きのもちゆき

いろもかもむかしはこさあ匂へきもうるけん人の影を戀しき

貫之

河原は左のおはいまうち君の身まかりて後。か
の家にまかりてありけるに。しほがまといふと
ころのさまをほくれりけるを見てよめる

君まさて烟たえむしほがまのうらさびしくも見えわたるかな

藤原はともしもの朝臣の。右近中將にてすみ侍け

るさうしの。身まかりて後。人もすますなりにけ

るに。秋の夜ふけてものよりまうでさけるついで

に。見いれければもどありませんさういとしげ

くあれたりけるを見て。はやくろくに侍けさば。

むかしをおもひやりてよめる

さみがうるしひとむらすくさ虫のねのしげき野べとも成おける哉

みはるは
あまそけ

これたかのみこの。ちの侍けん時に。よたりけ
む歌をもとこひければ。かきておくりけるおくに。
よみてかけりける

ことならば言のばさへもさねならむみれば涙のたさまさりけり

友則

題しらす

なき人のやどにのよはしほとくさすのけてねおのみなくとつけなむ

誰見よと花さけるらんしら雲のたつ野とはやく成にし物を

式部卿のみこ。閑院の五のみこにすみわたりける

を。いくばくもあらで。女みこの身まかりにける

時に。かのみこのとみける。帳のかたひらのひも

に。文をゆひつけたまける哉。とりてみればむか

しの手にて。この歌をなん。かきつけたりける

かすくに我をぬすれぬものならば山は霞をおはさとは見よ

を。これ。人比國にまかりけるまに。女。にはかに

やまひをして。いとよわく成おける時。よみおき

て。身まかりにける

こゑをたにさかでわかる。たまよりもなき床にねん君うかなしき

やまひにわづらひ侍ける秋こちのたのもしげな

く登えければ。よみで人のもとにつかはしける

もみちばを風にまかせてみるよりもはかなき物はいのちのけり

千
里

讀人不知

舞をなごわだなるものと思ひけむわが身も草におかねばかりを

藤原これもと

やまをしてよわくなりける時よめる

つひも行道とはかねて聞まかきさのふけふと思はせしを

業平

かひのくもいひしめて侍ける人よふらはむと

てまかりけるみちなかにてにはるにやまひを

していまくとなりければよみて京にもて

まかりて母にみせよといひて人に花け侍ける

うた

うらめしの行らひぢど不思ひこし今はかきとのかとでなまけり

しげはる

古今和歌集巻第十七

雑歌上

題しらす

我うへに舞予なくなるあまの河とわたる船のうみのしづくか

讀人不知

思ふとちまどむせるよはから錦たしまくをしきものにも有ける

うれしさをなにつしまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

かきとなき君が爲にどをる花は時しもわかぬものにも有ける

ある人のいはく此歌はささのおほいまうも

春はな

むらさきのひともとゆゑにむさし野の草はみながらわはれとぞみる

先れおとうとをもて侍ける人にうへのさぬをお

くるとてよみてやりける

紫のいろこき時はめはるに野なる草木すわかれざりける

業平

大納言ふちわらのくにつねに朝臣宰相よと中

納言ふなりけるときをそめぬうへのさぬのあ

やをおくるとてよめる

いろなしと人やみるらむむしよりふかき心あつめてしものを

近院右大臣

のかみといふ所にこもり侍けるをにはかにかうふ

またまはれりければよろこびいひつかはすとて

よみてつかはしける

日のひかりやふしわかねばいろのかみふりにし里も花もささけり

ふるのいまみち

二條后のまだ東宮のみやすむ所としけるときを

大はら野にまうで給ひける日よめる

おははらやをしほの山もけふころは神世のこともおもひらつらめ

業平

五節のまひ艇を見てよめる

天津風雲のかよひちふきとちよとめめ姿まばしといひむ

よしみねれ

むねさだ

五節のあしたに。るんざし玉のおちたりけるを
見て。たがさるむと。さぶらひてよめる
ぬしやたれとへとしら玉いはさくにはらはなべてやあはれと思はん

河原の
左のおほい
まうちきみ

寛平修時にうへのさぶらひに侍けるをのこども
か先をもたせて。さぶらひの宮はかたに。おほみ

きれおろせと。さこえに。たてまつりたりけるを。
藏人をもわらひて。かめをおまへにもていでし。

ともかくもいはすなりあければ。つかひれかへ
りきて。さなんありつるといひければ。藏人の中
にれくりける

玉だれのこがめやいづらさきれ磯は浪わけおきに出にけり
女をもの。見てわらひければ。よめる

としゆち

かたちころみ山がくれのくち木なれ心は花になさむなりなむ

けんげいほうし

かただがへに。人の家にまかれりける時に。ある
じのきぬをさせたりけるを。あしたにかへすと

て。よみける

蟬のはのよるの衣はうすければうつりがこくも匂ひぬるかな

ともものり

題しらす

おそく出る月にもある哉あま引け山のあなたもをしむへうと

讀人不知

我心なぐさめぬねつさらしなやをばすて山にてる月をみて
おほかたは月をも先でじこれぞこのつもれば人の老となるもの

業平

月おもしろしとて。凡河内躬恒が。まうできたり
けるに。よめる

かつ見れどうとくもあるかな月かけいたらぬ里もららじと思へば

貫之

ふたつあき物と思ひしをみなるこに山のはならでいづる月影
題しらす

讀人不知

天の河雲のみをふてとやければひかりとめす月かながるし
あらずして月のかくるし山もとはあなたおもてすこひしかりける

これたかのみこの。かりしけるともにもまのりて。

やどりにかへりて。夜ひとよ。酒のみ物語をしけ
るに。十一日の月も。かくれなんとまけるをり
に。みこゑひて。うちへいりなむとしければよみ
侍ける

わかなくにまだきも月のかくるし山のはにげてぬきすもあらなん

業平

田むらのみかきの修時。齋院に侍ける。あきら

けいこのみこそ。はくあやまちありといをて。齋院をのへられむとしけるを。うのこを。やみにければよめる

大ぞらをてり行月し消ければ雲かくせともひかりけなくに

題しらす

いろのかみふるからをのゝもどがしはもとの心はわすられなくに

あま後信 詠人不知

いふまへの野中のしみづぬるけれども心の心をするひとなくむ

古へのしづけをたまさいやしきもよきもさうりにありしもの也

今ころあき我もむかしはをどこ山さかゆく時も有こしものを

よの中にふりぬる物はつゝの國はながらの橋とわれとなまけり

さゝのはにふりつむ雪のうきをおもみもどくだら行わがさかりはも

大あらしのもりの下草おぬればたまもすさめすかる人もあし

又は。おほきものみつのたまへに。

かすふればたまらぬものをもしとひてことしはいたく花すまにける

おしらくのこむとせせば問をしてなしたこたへてあさざらましを

このみつの歌は。むかしあまける。みたりのおき

れによりるとなむ。

さかさまに年もゆかなむとりもあへず過るよはひやともにかへること

ととどむる物にしあらねばとし月をわはれあなうと過しつる哉

ととめあへずうへもとまはははきけりしかもほれなく過るよとひか

鏡山いさたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老やしぬると

此歌は。ある人のいはく。大とものくろぬしがあやと

なりひらの朝臣のはゝのみこ。長岡にすみ侍ける

時あ。なりひら。宮つかへすとて。時々も。えまか

り。とぶらはす侍ければしはすばかりあ。はゝのみ

このもとより。とみのことして。ふみをもてまう

できたり。あけてみれば。ことばとなくありけ

るうた

おしぬればさぬ川のありといへばよくみまほしき君かな

世の中にさらぬわかれのまくもがな千代もといのる人の子のたえ

しら雪のやふりしけるかへる山かへるくもおいにけるかな

おなじ時。うへのさふらひにて。をのこをもに

葉平

むねやれ

寛平時。宮の歌合の歌

おほみき給ひて。おほみあろびありけるついでに。
つらまつる

としゆき

ちとやふるうちの子し守なきをしと余とわれもふ年のへぬれば
我みても久しくなりぬ住よしの岸のひめ松いくよへぬらむ
住よしのさしのひめ松人ならばいくよかへしととましましものを
あづさ弓いろへの小松たがよにかよろづよかけてたね茂まきけむ

讀人不知

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のをのへにたてて松ならなくに
誰をかもしる人にせむたかきこの松もむかしの友ならなくに
わたつみのおきつしはあひにうか糸沫の消ぬものあらよるかたもなし讀人不知
わたつみのかさしにさせるしうたへの涙もてゆへるあはぢ島山
わたの原よせくる涙のしばくもみまくのほしき玉つしまかも
離波がたしほみちくらまあま衣たみの島にたづなき渡る

つらゆきが。つみれ國に侍ける時。やまどより。
こえまうでまて。よみて。つかはしける
君をおもひおぼつればまに鳴たづのたづれくれは予有とだに聞

藤原たふさ

かへし
れきつ涙たかしの涙ればま松のなにくろ君をまらわたとつれ

貫之

なにはにまかれりける時よ来る
なふとがたふふる玉葉をかりけめの鹽とぞ我は成ぬべうなる
あひしれりける人れ。住よしにまうでけるに。よ
みて遣しける

思琴

住よしとあまはつやまながわそな人わすれ草おふといふなり
なにはへまかまける時。たみの島あて。雨にあ
ひて。よめる

貫之

雨によりたみの島をけふゆけば名にはかくれぬ物にぞ有ける
法皇。にし河をおはしましたりける日。鶴洲ふた
てりといふを。題にて。よませ給ひける
あしたづのたてる河邊をふく風によせて歸らぬ浪かどをみる

中務のみこの家の池も。船をつくりて。おろしは
も先てあろびける日。法皇。降らんじにおはしま
したりけり夕きまつかも。かへりおはしまさむ
としけるをりに。よみてたてまつりける
水のうへにうかべる船の君ならばこころとまるといはまし物を

伊勢

あらこといふ所あてよめる
みやこまでひきかよへるからことは浪のをそげて風予ひきける
しんせい

こさちらす瀧のしら玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる
行平

布引のたきにてよめる
布引のたきのもどにて。人あつまきて。歌よみ
承均法師

ける時によめる
ぬきみたる人ころあるらししら玉たまなくもちるか袖のせばきに
梁平

よし野の瀧を見てよめる
たがためにひきてさらせる布なれやよをへてみれどとる人もなき
承均法師

題しらす
きよ瀧は瀬々のしら糸くりためて山わけ衣おきてまじを
神だい法師

龍門にまぢで。瀧のほとにてよめる
たちぬのぬ衣さし人もあきものを何やま姫の布さらすらむ
伊勢

朱雀院のみかきぬのひきの瀧ゆらんせんて。
文月のなぬかの日。おはしましてありけるとき
たよふらふ人に。うたよませ給をけるに。よ

ぬしなくてさらせる布をたなばたにわが心とやけふわかさまし
たらばなの

ぬしなくてさらせる布をたなばたにわが心とやけふわかさまし
ながも

ひえの山なるおきばの瀧を見てよめる
落たさつ瀧のみなみ年つらも老るけらしあくらさそぢあき
忠峯

おなじ瀧をよめる
風ふけどころもさらぬえら雲は世をへておつる水にぞ有ける
恒

田むらの時時に。女ばうれさふらひめて。浮屏風の
あゆらむしけるに。瀧おちたをけるところおもし
ろしこれを題にて歌よめど。さふらふ人に。おはせ
られければよめる

思ひせく心のうちの瀧なれやおつとわみれおとのきこえぬ
三條の町

屏風のゑなる花をよめる
咲ろめし時より後はうちばへて世は春なれや花のつねなる
貫之

ありてはす山田の稻のこきたれてなきころわたれ秋れうければ
古今和歌集巻第十八
これのり

雑歌下
題しらす

世の中は何がつねなるあすか河さのふれふちぞけふは瀬になる
誰人不知

いく世しもあらじわが身をなすもかく蟹のかるもにおもひみだるし

馬のくるみねの朝霧はれずのみ思ひつきせぬよの中のうき
しかりとてうむかれなくにととしあればまづなげぬあなう世の中たかむら
かひのかみお侍ける時。京へまかりのぼりける人
なつかはしけり

みやこ人いかにとほ山高みはれぬ雲のわぶとこたへよ さだき

文屋のやすびでが。みかはのどうになりてあかた

見には。えいでたしやと。いひやれまける返事

によめる

わびぬれば身をうき草のねをたえてさるふ水あらばいなんとぞ思ふ 小町

あはれてふこところうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ 讀人不知

袋てふことばはとまおく露はむかしをこふるなみだなりけり

世の中のうきもつらさもつげなくにまづしる物となみだなりけり

よのなかは夢かうつゝか現ともゆめともしらすありてなければ

世の中にいづらわが身れありてなき袋とやいはむあなうとやいはん

山ざとは物のさびしさこところあれ世のうきよりはすみよかりけり

しら雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住ぬる世に社有けれ
これたらのみこ
しどにけむ聞てもいとへよの中はなみのまわきに風ぞしくゆる
ふるのいさみち

いつくにか世をばいとほむ心ころ野にも幽にもまよふべうなれ 素性

よの中はむるしよりやはうかりけむ我身ひとつれ爲になれるる

世れ中をいとふ山への草木とやあなうの花の色に出にけむ

みよし野の山のあなたに宿もがなよのうき時のかくれがにせむ

よにふればうさころまされみよし野の岩のかけ道ふみならしてん

いかならむ岩はれ中にすまばかは世れうきことの開えこざらむ

あし引の山のまあくかくれなむうきよの中はあるかひもなし

世の中れうけくにあきぬかく山のこれはにふさるゆきやけなまし

おきともじなさうた

よのうきめ見へぬ山路へいらむにはおもふ人ころほだしなりけれ ものいへのな

世を捨て山おいる人山にてもなほうき時はいつちあくらむ 躬恒

物おもひけるとき。いとさなき子をみて。よれる

今さらは何おひらつらむ竹の子のうきふしまげき世とはあらすや

題しらす

よにふさばことのはまげき呉竹のうきふしとにうぐひすすなく 讀人不知

木にもあらず草にもあらず竹のよのはしに我身はさぬへうなり
ある人のいはく。たかつみこのうた

わが身からうき世の中を歎きつゝ人の爲さへかなしかるらむ

あきの國にながされて侍ける時によめる

おもひきやひなのわかれにおどろへてあまのなはたさしきりせんぞと

田むらの時時に。ことにあたりて。津の國の。すまをら

ふ所にこもり侍けるに。宮のうちに侍ける人につ

かはしける

わくらはにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ行

左近將監をけて侍ける時に。女の。とふらひに

れこせたとける返事に。よみてつかはしける

あまびこのおどつれしとぞ今は思ふわれか人をと身をたどる世に

つかさどけて侍ける時よめる

うき世にはかきさせりとも見えなくなをわが身れいでがでにぞる

ありはてぬ命まつまのほとばかどうきとしげく思はずもがな

みこの宮のたちとささお侍けるを。宮づかへつかう

まつらすとて。とけて侍ける時よめる

ほくたぬのこのおもととに立ちよる春のみ山れかけを戀つゝ

時なとける人の。よはかお。時なくなりて。なげく

を見てみづからら。おげさもなく。よろこびもなき

みやぢの

さよ

き

文

か

平

ひかちなき谷には春もようなれば咲てとくちる物思ひもなし

とぞ。思ひてよめる

かづらふ侍ける時に。七條中宮。とばせ給へりけ

る。伊返事に。たてまつりける

久かたのなかにひたる里なればひのりをのみぞたのむべうなる

紀のとしさだが。あはのすけにまかりける時に。

うまのはなむけせんとして。けふといひおくれりけ

る時に。こゝかしこにまかりありきて。夜ふくる

遠見へざりければ。遣しける

今予しるくるしき物と人またむさとをばかれすとふへかまけり

こきたかのみこのもとにまかりかよひけるを。か

しらあるして。小野といふ所に侍けるに。正月に

とふらはむとて。まかりたりけるに。ひえの山の

ふもとよりけせば。雪いとふかくりけり。しひて

かのむろにまかりいたして。をがみけるに。つれ

づとして。そのものかなしくて。かへりまうでさ

て。よみておくりける

わすきては夢かぞと思ふおもひさや雪ふみわけて君をみんとは

ふかやぶ

伊

勢

業

平

深草のさとしそみ侍下。京へまうでくとして。もこ
ありける人に。よみておくりける

かへし

野とならばうづらと鳴て年はへむかりにだにやと君はこざらん

題しらす

讀人不知

我を君さにはれうらにありしかばうきめをみつのおまを成にき

此歌は。ある人。むかし。ととこ有けるをうなの。

をどこ。とはすきりにけきば。なにはのみつの寺

にまかりて。あまにありて。よみて。をどこに

かはせしける。となんらん入る

かへし

難波がたうらむへさまもおもはえずらつこをみつのおまをうはなる
今さらにとよべき人もおもはえずやへむぐらして門をせめてん

友だちの久まうまうでこざりけるもとは。よみて

遣しける

水のおもあふるさつきのうき草のうきことわれやねをたえてこぬ

恒

人をさばで。おさしく有けるをりに。あひうらみ

身をすてく行やしはけんおもふよりはかなるものは必ずけり

むねをかのおほよりか。こしよりまうできたまけ

る時雪のふせけるを見て。おのが思をば。この

雪のごとくなんのもれる。といひける我まは。よ

める

君がおもひ雪ごつらばたのまを春より後はあらじと思へば

あへし

きみをのみ思ひこしちのしら山はいつかは雪のさゆるときある

宗岳大願

こしなせける人につかはしける

おもひやるこしれしら山しらねをもひとよも夢にこらぬよぞなき

貫之

題しらす

いざこゝにわが世はへなむすがはらやふまみのさとのわれまくもをし讀人不知

わが庵之三輪の山もと懸しくことふらひきませ杉たてる門

我いははみやこれたのみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふあり

あまにけりあはれいくよの宿なれや住けん人のれどづれもせぬ

ならへまかどはる時に。あまたる家に。女の琴ひ

さけるをさして。よみていれたりける

讀人不知

わび人の住べき宿と見るなへになげさくはしるここのねずする むねさだ

はつせにまうづる道に。ならの京にやされどける

時よ光る

人ふるすさをいとひてこしかさもならのみやこもうき名えけり 二

題しらす

世の中はいづれをさしてわがならむ行とまるを予やせしただむる 讀人不知

逢坂のあらしの風わきむけれゆくへしらねばわびつし予ぬる

かせのうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもまらずありぬへうこ

家をうりてよ光る

あすか河ふちにもあらぬわが宿もせにかはり行物にぞ有ける 伊

つくしむ侍ける時に。まかりかよひつし。暮うち

ける人のもとに。京にかへりまうでさてつかとし

ける

故郷は見しこどもあらずをれすえのくちし所を戀しかりける 大

女どもだちと物がたりして。わかれて後あるつら

はむける。

あかざりし袖の中に入にけん我たまひはなきこふちする 〃

寛平御時は。もろこしのはうぐわんわ。めされて

みちのく

則

伊勢

二條

侍ける時は。酒たふはるついでに。よみ侍ける

あよ竹のよながさうへにはつ霜のおまめて物を思ふころ哉 〃

題しらす

風ふけばおきつしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん 讀人不知

ある人。この歌はむかし。大和國なりける人のむ

すめにある人そみわたりける。此女。おやもなく

なりて。家もわろく成ゆくわひだ。此男。かふちの

國に。人をあひまりてかよひつし。かれやうみれ

みなりゆきけり。さりけれども。ほらげなるけし

きもみえで。河内へいくことに。男の心れこどく

あしつし。いたしやまけきは。あやしと思をても

しなきまに。こど心もやあると。うたがひて。月れ

おもしろかまける夜。かふちへいくまねにて。せ

んざいのなかに。かくれて見ければ。よふくるま

で琴をかきならしつし。うちまげきて。此歌をよ

みて。ねむければ。これを聞て。うきよと又ほるへ

もまらさすなごにけり。となんいひつたへたる

讀人不知

たふふ

たがみろぎゆふつけ鳥かから衣たつたの山にむらばへてなく
わすられん時しのべとどほまぢとり行へもしらぬ跡をどもむる

貞観時。萬葉集。なつばかりつとむる予とむる
はせ給ひければよみてたてまつりける

神無月しぐれふりおけるならのはの名におふ宮のふるどがこれ

寛平時。歌奉れりけるついでにたてまつりける

あしたづのひとりおくれ鳴こゑと雲のうへまで聞ゆつかなん

人しれず思ふ心とはる霞たちいでし君がめにも見えなむ

歌めしける時に。たてまつるとてよみて。おく

にかきあげて。たてまつりけり

山川のおとにのみさくもいしきをみをはやながらみるよしむがな

古今和歌集巻第十九

雑体 短哥

題しらす

あふことの まれなるいろに おもひろ光 わが身はつねに

あま雲の はるしときなきいづれおのねの もえのしとはに

れもへとも あふことかたしなになにしかも 人をうらみむ

わたつみの おきをよかめて おもひてし思ひはいまは

ふんやの
ありする

千
かちおん
里

伊
勢

讀
人不知

いたづらに なりぬべうと ゆく水の たゆる時なく
かくなはに 思ひみたれて みる雪の けなはけぬぞも
おもへとも 文の身なれば なはやまず おもひはふかし
あし引の 山した水の ながくれま たきつこころを
たれおかも あひかたらはん 色に出ば 人しりぬべみ
そみずめの ゆふべもなれば ひどりめて あそれくど
なげきあまり せんすべなみに にはおいで 立やすらへば
しろたへは 衣は袖に おく露の なけばけぬべく
思へとも なはあげられる はる霞 よろにも人に
あはれとおもへば

ふる歌たてまつりし時の。もくろくの。そのながうた

ちはやふる 神のみよより くれ竹の 世々おもたえず 貫
あまびこの おどりの山の 春霞 思ひみたれて
さみだきの ろらもとよりに ぎよ更で やまはとよぎす
なくこどに たれもねぎえて からにしき たつたれ山の
もみちばを 見てのみしのみ 神な月 しぐれくして
冬のよの 庭もはだきに ふる雪の 猶きえあへも
としこどに とまにつけつゝ あはれてふ ことをいひつゝ

之

君をのみ	ふじのぬの	ふちころも	すべらぎれ	いせのうみの	たまのをの	としをへて	つかふとて	いたまあらみ	くき竹の	いかよして	ありきてふ	こののはを	あとしなし	ちりの身に	いにしへも	こゝちして
ちよにといはふ	あまゆる思ひも	あまゆる心も	ねはせのしこみ	浦のしほがひ	みじかきこゝろ	大みやにれみ	かへりみもせぬ	ふる春雨の	よけれふること	おもふ心を	人まぢころは	あまの空まで	今もあはせの	つもさることを	くすどけがせる	あまのなまげも
世の人の	あかずして	あぢくされ	まきくの	ひろひあつめ	思ひあへず	久らたの	わがやどの	もりやしぬらむ	あかりせば	のばへまし	うれしけれ	きこえあひ	くたさるを	さはるら流	けだもの	おもはえず
思ひするがの	わかるくなみだ	ここのはことば	中につくすと	とれりすとれど	なほあらたまの	ひるよるわかず	しのぶ草あふる		いかほのぬまの	あはれむかし	身はしむながら	すゑは世までの	あゆはつげとや	これをおもへば	雲にはえむ	ひまのこゝろ

思

琴

ほこらまき	身なりしを	みかさより	ねもはえす	きかざりき	たなびかれ	袖をかし	身ながらに	なりにけり	やよけきば	かへしつゝ	たつなみの	をしければ	なりぬとも	くすりもが	君が世にあふ	ちはやふる	
かきはわれども	たれかて秋の	このへもる身の	このかさねの	今は野山し	夏はうつせみ	ふゆと霜にす	花もれる年を	これにうはれる	身はいやしくて	ながらの橋の	なみのまわにや	こしれ國なる	おどほのたきの	君がやちよを	あふ坂山のいはし	神な月とや	
てるひかり	くるかたる	みかさもり	中にては	ちかければ	あきくらし	せめらるゝ	しるせれば	わたくしの	としたかき	ながらへて	おぼくれん	しら山れ	おどにさく	わかえつゝ見む	水こがくれたり	はさよりは	
ちのまもりの	あまむきい	をさししくも	あらしの風も	はるを霞に	秋はしとれに	かゝるわびしさ	いつ下のむつに	おいのかすさへ	ここのくるしさ	離波の浦は	さすがにいれち	かしらはまろく	おいすしなずの		かくな	くもともあらず	船

恒

うちしぐね 紅葉とにもに ふるさとの よし野の山の
 山あらしも 空をむく日ごとに なり行ば 玉のをとけて
 こきちらし ぬられみだれて しもこほま いやかたまれる
 庭のおもに むら／＼みゆる 冬くさの うへにふりしく
 しら雪の のり／＼て あらたまの 年をあまたも
 そくしつるかき

七條后らせ給ふにける後によみける

おきつあみ あきけみまざる みやのうちば 年へてすみし 伊
 いせのあまも ふねながしたる こうちして よらむかたなく
 かなしきに なみだの色ゆ くれないは わせらがなかの
 しぐきにで 秋のもみちと ひと／＼は をのがちり／＼
 わかれなば たのひかげなく なりはてゝ ともるものとは
 花す／＼き 君なき庭に むれたちて ろらまねかば
 はつらりの なさわたりの よろおころみめ

勢

旋頭歌

題ま向す

打渡そをちかた火に物まうすわれろのうこおしろく咲るは何の花をも 人不知
 かみし

春さればのべにまづ咲みれをわかぬ花まひなしにたよなるべき花のさくれや
 題しらす

はつせ河ふる川のべにふたもどある杉年をへて又もわひみんふたもどある杉
 君がさすみるさの山に紅葉ばのいろ神な月しぐれの雨のろむる之けり貫 之

誹諧歌

題しらす

梅の花見にころきつれうぐひすのひとく／＼といとひしもをる 誰人不知
 山吹の花いろ衣ぬしやたれとへどこたへすくちなしおして 素 行性

いくばくは田をつくれればかほと／＼きそしでの田をさをあきなく／＼よぶ教
 七月六日。たきはたのころをよみける
 いつしうとまだく心をはぎにあげて天の河原をけふや渡らん かねすけ

だいらす

むつとともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふ夜は 躬 恒
 秋の／＼になまめきたてる我みなへしあなかしかまし花もひと／＼き 遍 人不知
 あきくれば野へにたはる／＼をみなへしいづれの人かつまでみるべき 誰人不知
 秋霧のはれてくもれば女郎花はなのすがたがみえかくさする
 花とみてをらむとすれば女郎花うた／＼あるさまの名ふこそありけれ

寛平浄時のささの宮の歌合のうた

秋風にはころびぬらし藤ばのまつりさせてふきまじくすなく

あす。春たゝむとしける日。となりれ家のかたよ

里。風の。雪を吹こしけるをみてうのとなまへ。

よみてつかはしける

冬ながら春のとなり近ければな垣より花はちりける

題しらす

いそれかみふりおし戀の神さびてたゝるに我はいぞねのねつる

枕よりあどより戀のせめくればせんかたなみぞとこなかみをも

戀しきがかたもたころありとさけたてれをれせもなき心ち哉

ありぬやとこゝろみがてらあひみねばたはふれにくきまてを戀しき

みゝなしれ山の口なしえてしがあおもひのいろのした染にせん

あし引れやまだのろぼつおれをさへわをほしというれはしきを

ふじのねのあらぬ思ひにもねばもえかるだふけたぬむなしけふりを

あひみまくほしはかすなく有ながら人につきなみまほひころすれ

人にあはむつきのなきには思をおきてむねはしりびに心やけを

春霞たな引のべのわか赤にもなりみてじかな人もつむやと

題しらす

思へせもなほうとまれ海春がすみかゝらぬ山のあらじとおもへば

春の野のしげき草ばれつまごひにとびたつきじのほろゝとぞ鳴

秋のゝにつまなき鹿れとしをへてなうわが戀れかひよとぞなく

蟬のはれはひとへにうすき夏衣なればよどあん物にやとあらぬ

かくれぬれしたよりおふるねぬなはのねぬ名はたゝじくるおいとひぞた

ことならば思はずとやはいひはてぬなうよのあかのたまだすきなる

思ふてふ人の心のくまごにたちかくれつゝみるよしもがな

おもへせも思はずとれみいふなればいなやおもはじおもふかひなし

我をのみおもふといはゝあるべきをぬでや心はおほぬさにして

われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人のわれをおもはぬ

おもひけん人をぞどもに思はまじまさしやむくいなかりけりやは

いでしゆかむ人をとゝめむよしなきにとなるのかたにはなもひぬ哉

くきなるにろめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふ也

いとくるゝわが身はくるの駒なきやのがひがてらにはなちすてつる

うぐをそのこずのやどりのふるすとやわきには人のつきあかるらん

さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐ霜よ残わがひとりぬる

あふとれ今はとつかになりぬれば夜ふかゝらではつきあかりけり

もろこしのよし野のやまにこもるともおくれむと思ふ我ならなくに

左平

まのほい

まうち

君 奥

讀人不知
貞 文
きのよしひと
み つ ね
讀人不知
讀人不知
ふかやふ
讀人不知
きのめのと
きのありとも
小 町
おさかせ

雲はれぬあさまの山のおさましや人の心波見てころやせめ
 なにはなるながらのはしもつくる今わが身よなにとどへむ
 まめおれをなによよけくかるかやの乱であればあしけくもなし
 何かろの名のたつをのをしからむし理てまよふは我ひとりかは
 いとこなりけるをどこに。よろへて人のいひけ
 興 人 不 知 風 勢

よるながらわが身にいとよるといへばたゞいつはりにすくばかりく
 ねぎことをさのみさくけむやしろころはてはなげき秋とあるらめ
 なげきこる山としたかく成ぬをばつらづるのみまづつかれぬる
 なげきをばこりけみはみてあし引地山のかひなくなりぬべうあり
 人こふることをおもとどになひもてあふまなきころわびしかりけれ
 宵のまに出で入ぬる三日月のわれて物思ふころにもあるかな
 ろへにとてとすればかゝりかくすまばあないひしらすあふささるさあ
 世の中のうきたびごととに身をなけばふかき谷こそ淺く奇麗な光
 よの中はいかにくるまと思ふらんこゝらの人にうらみらるれば
 何をして身のいたずらに老ぬらん年のおもはむことぞやさしき
 身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかゝるとしるべく
 興 人 不 知 風

しら雪のともにおが身はふりぬれど心はききえぬ物にぞ有ける
 題しらす
 梅のはなささての後のみなればやすき物とのみ人のいふらむ
 法皇。にし河におはしましたりける日。猿。山のか
 ひにさけぶ。といふことを題に下。よませ給ひけ
 る
 わびしらにましらあきろ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ
 題しらす
 世をいと木のもとに立よりてうつぶしうめのあさのきぬこ
 古今和歌集卷第二十
 大歌所傳歌
 かほなほびのうた
 あたらしき年はじめにかくしころ千年をかねてたのしきをつめ
 續日本紀には。づかへまつら先よろづよまであ
 ふるさやまどまひけうた
 しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかき
 あふみま
 近江よりあさたちくまばうねの野にたづな鳴なる明ぬこのよは

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

千 里 讀 人 不 知

みづぐきふり

みづぐきのやかたに妹とあれどねての朝けの霜のふりはも

しつ山ふり

神がきのみむろの山のさかきばは神のみまへにしげとあひにけり
霜やたびおけせかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のさねかも
まさもくのあなしの山のやま人と人もみるが山うつらせよ

み山にはあらさふるらしとやまなるまさきのうつら色づきにけり
みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこのびくりに
我がとれいたるのしみづ里とはみ人しくまぬはみくさおをにけり
ひるめのうた

さくのくまひのくま河に駒と走てしばし水のへかげをだにみん
かへしものうた

青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふるさはうめの花がさ
まがねふくきびれ中山おびにせるはる谷河のおとのさやけき

この歌は承和の遷へのさびのくにに歌

みまさかやく苑のさら山さうくにわが名はたてじ萬代までに

これは水のその遷へのみまさかのくにの歌
みのく國せきの藤河たえずして君につかへむよろづよまでに

これが元慶の遷へのみれうた
君が代とかぎりもあらじながはまれ真砂の数はよみつくととも

これも仁和の遷へのいせのくにのうた
あふみのやかいみの山をたてたればかねてみゆる君が千年は
くろぬし

これは今上の遷へのあふみうた

東歌

みちのくうた

あふくまに霧立くも里あけぬとも君をばやらじまてばすべなし
みちのくといづくにわきとしほがまの浦とく舟のほなでかなしも
わがせこそ都にやりて盤がまのまがきの鳥のまつぞこひまき
をくろさきみつのこじまの人なみはみやこのほとにいざといはましを
みさふらひみかさどまらせみやきのこの下露は雨にまされり
もがみ河のほればくだるいな舟のゆなにはあらずこの月ばかり
君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山なみもこえなん
さがみうた

こよろぎのいろたちならしいろなつむめづしぬらすなまきにをれなみ

ひたちうた

つくばねのこのもかれもにかけはあれを君がみかけあますかけはなし

かひうた

かひがねをさやにも見じがけくれなくよこほりふさるさやの中山
甲斐がね残ねこし山こしふく風を人にもがもやこどつてやらむ

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなるきしれなまもならずもねてかたらはん

冬の賀義のまつりうた

ちはやぶるかもやしろのひめ小松萬代ふとも色はかはらじ

としゆき

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

巻第十 物名部

ひぐらし

ろま人はみや木ひぐらしをし引れ山れやま彦よびとよむあり

貫之

在郭公下。患蟬上

かけりてもなをかたまのきてもみんからはなのほどなりふし物取ちかかん

をかたまの木。友則下

くれのおも

こし時とこひつしをれば夕ぐれのおもかげにのみ見にわたるかな

貫之

忍草。利貞下

おきのの みやこしま

おきののて身をやくよりもかなしきはみやこしまへのわかれなりけり小

町

からこと。清行下

ろ光どの あはた

ろ光をばよろめとのみどのがれゆく雲のあはたつ山のふもとに

あやもち

この歌は、水のをのみかどの。よろめとのより。あは

たへうつり給ふける時に。よ光る

桂宮下

巻第十一

おく山の菅の根しのぎふる雪の下

けふ人をこふる心はおほの河ながるゝ水におとらどとけり

わきもこにあふさる山れしのすゝきはには出ずも戀わたるかな

巻第十三

こひしくはしたにを思へむらさきの下

いぬがみのとこの山なるいさや河いさどこたへよわがなもらすな

此歌。ある人。あめれみかどれ。あふみのうねるに
給へるぞ

返し

やましなのおとこは瀧のおとこだに人のしるべくわがこひめやも

う

ね

め

卷第十四

おもふてふまのはのみや秋をへて下

ろとほりひめの。ひとりゐて。みかさをこひたて

まつりて

わがせこがくべきよひなまをがにのくもふるまひかねてしるしも

源義父。戀しどはたかなづけしむことあらむ下

其

之

道しらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀わすれ草

明治廿五年十二月廿七日印刷
同 廿五年十二月 發行 出版

定價二十錢

著者故人

大内記紀友則 前甲斐少目凡河内躬恒
御書所預紀貫之 右衛門府生壬生忠岑

發行者

磯部太郎兵衛

東京市麹町區麹町四丁目十三番地

全

野村銀次郎

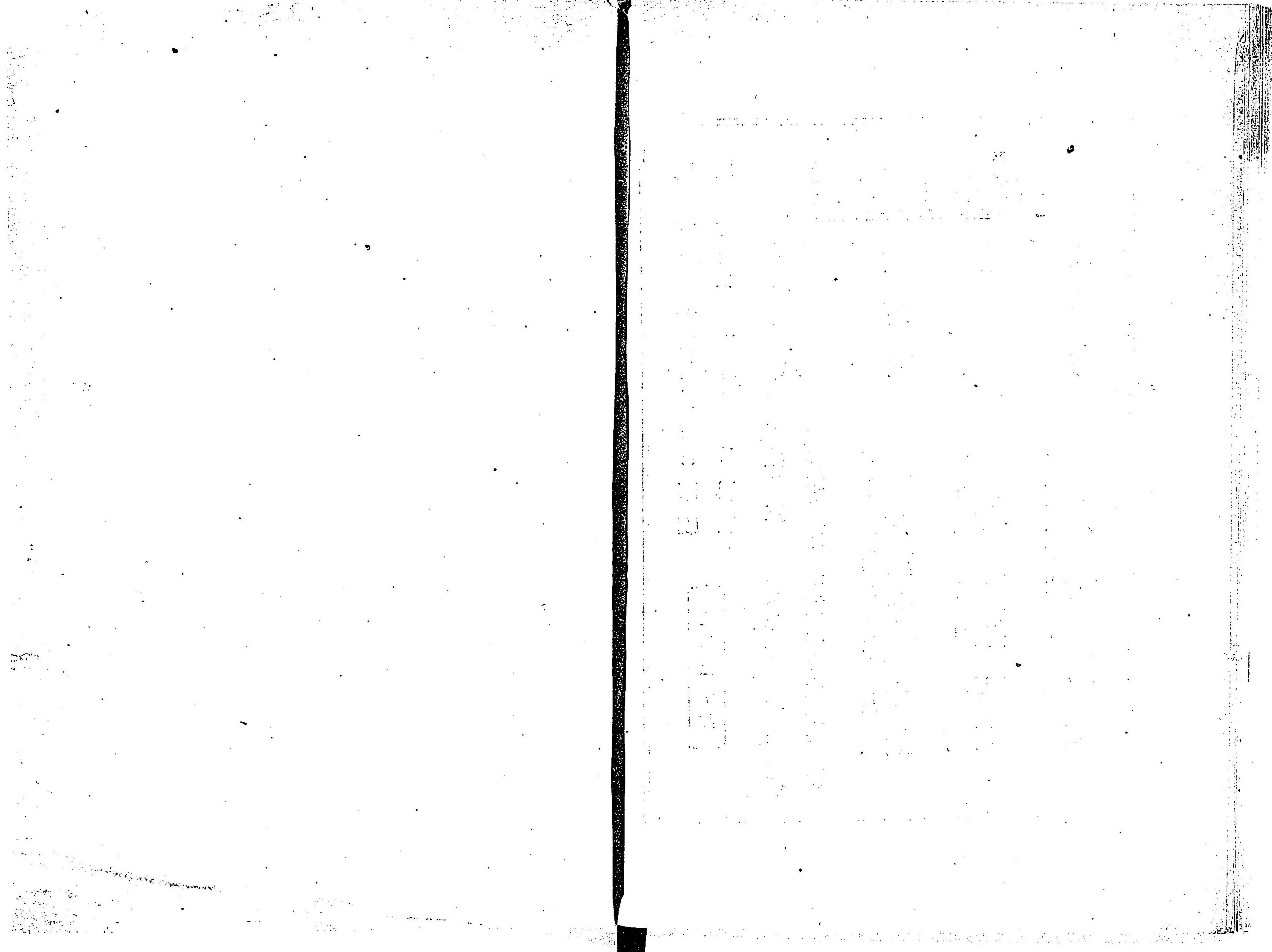
全 日本橋區通り三丁目十番地

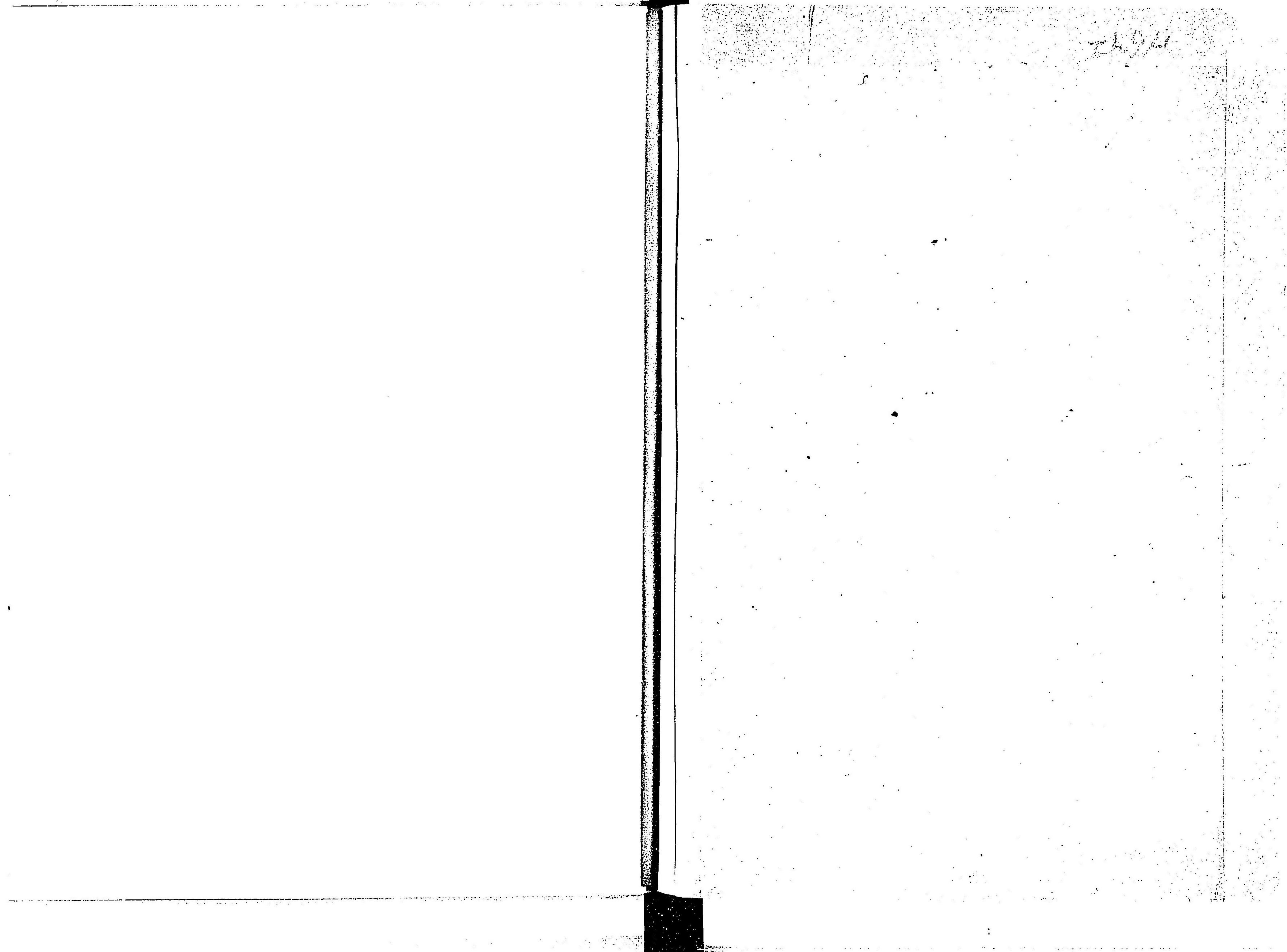
印刷者

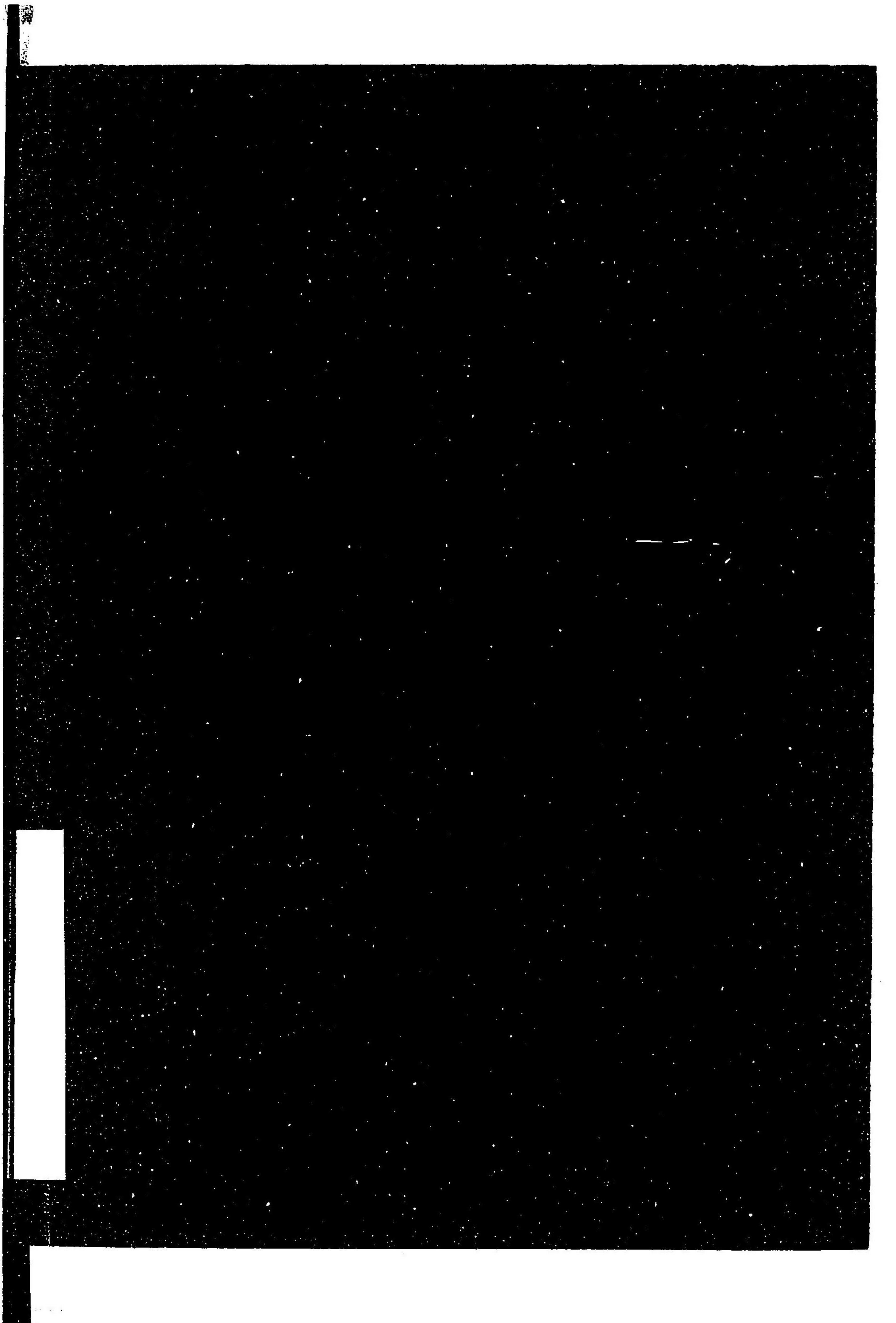
大場沃美

全 神田區柳原河岸第十一號地

古今和歌集







特 22

452

古今和歌集

国立国会図書館

085936-000-0

特 22-452

古今和歌集

磯部 太郎兵衛

野村 銀次郎 / 刊

M25

DBD-0542

